

[翻訳]

## H. H. ホウベン 『ゲーテのエッカーマン — ある控え目な人間の伝記』 (5)

林 久 博

### 17. 悪魔としてのゲーテ

1829年末、ゲーテ＝シラー往復書簡が完成した。四年前、『対話』を出版するために定めていた時期がようやく到来したのである。だからエッカーマンはその件についてゲーテと話し合わねばならなかった。1830年1月24日、エッカーマンはゲーテに「対話を書き進めている」<sup>(1)</sup>ことを報告し、原稿を二三枚提出した。だがゲーテはそこに「歪曲」<sup>(2)</sup>があることを指摘して彼を咎めた。その後ゲーテはこの件について一言も話題にしなかったので、エッカーマンは自分の本の今後について敢えてゲーテに聞こうとはしなかった。3月、ゲーテは作品集の第38巻と第39巻の編集をエッカーマンに委ねた。それ以外にも仕事があった。一年後には全40巻が完成することになっていたのだ。生きている間に完成するとはゲーテも期待していなかった。ゲーテが今取り組んでいたのは『ファウスト』と『詩と真実』第四巻などであったが、それらは全集の補遺となる予定だった。ゲーテはエッカーマンに『ファウスト』を読んで聞かせ、英語の授業について頻繁に話し合った。またしてもエッカーマンは英語の授業で生計を立てねばならなかったからである。ソレの指示で、彼は12月からカール・アレクサンダー皇太子に英語を教えていた。皇太子はエッカーマンと文学をやるとよい、とゲーテは主張したが、大公妃は差し当たり文学には何の関心も示さなかった。皇太子の教師であれば、エッカーマンもある程度安定したポストを手に入れたということになるだろう。もし彼がそこでしばらく頑張れば、宮廷の古い慣習に従って簡単には首を切られることはないからである。

ゲーテも大真面目にエッカーマンの将来を考えた。1829年の夏以来、エッカーマンをさんざん悩ましていたバイエルン王への献呈詩にゲーテも熱心に関わった。1月、二番目の詩はゲーテ自身の手によって徹底的に修正された。詩があと三つあれば連作として完成するのだが、エッカーマンは三つ以上ひねり出せなかった。ゲーテは賞賛を惜しまなかった。エッカーマンの日記と手紙が誇張していなければ、ゲーテはエッカーマン自身の「冷静さ」とバイロンの「大胆さ」<sup>(3)</sup>が詩の中で調和しているのを見て取った。一ヶ月間丸々、二人はこの三部作を推敲した。清書にもやたらと時間がかかった。4月18日、これを出版業者のコッタに宛ててミュンヘンへ発送した。ゲーテは「手紙を何通か口述筆記」<sup>(4)</sup>させた。その中でも特にコッタ夫人にはあまりにもわざわざらしい手紙を口述筆記させ、転送をコッタ夫人の思いやりに委ねます、とお願いした。ルートヴィヒ王は数週間前からカプリに滞在中だった。ゲーテは「あらゆる手を尽くして」くれた。発送するのは導入部だけとした。というのも、アウグストが随分前に約束していたイタリア旅行がそうこうするうちに決定されたからである。彼を一人で送り出すのは、その奔放な性格からして危険だった。それでエッカーマンが彼に付き添わなく

てはならなくなった。旅の目的地はカプリだった。——そこに行けば三部作の詩人たる自分がルートヴィヒ王に紹介してもらえる！

アウグストは随行者であるエッカーマンの中におそらく監視役という役割を見て取っていたのだが、そのアウグストから驚くべき旅行計画を聞かされた。長期間に渡る二人旅をこの上もない幸福として期待するほど二人の仲は良くなかった。天まで届くほど歓声を上げたい、という気分には決してならなかったのだ。彼はハンヒェンにこう書き記している。今みたいな暮らしをしていても成果は多くないし、「一度途轍もないことが起きるもの良いことなのかもしれません。」<sup>(5)</sup>これが「檸檬の花咲く」<sup>(6)</sup> 国に赴く気分と言えるだろうか？ 日記を読むと彼が何を心配していたかよく分かる。つまり彼は、帰って来た時にアウグステが誰かのフィアンセになっていることを恐れたのだ。一方でハンヒェンはこの知らせを聞いて愕然としてしまった。彼女は1829年の秋からワイマルからたった半日しか離れていないノルトハイムに暮らしていて、彼がすぐに会いに来てくれるのは間違いないと考えていた。その代わりに六ヶ月の予定で手の届かない所へ旅立ってしまうのだ。だが彼は、彼女との長い別れを申し訳ないとさえ思わなかったようだ！彼は中途半端な言葉をかけて彼女を慰めた。私がノルトハイムへ行って、そこで静かに『対話』に取り組んだ方がずっといいことなのでしょう。ですが、自分の意志ではどうにもならないのです。ワイマルに留まった方がいいのか、あるいはそうしないほうがいいのか、そんなことは誰も私に忠告できません。——だから一番いいのは「私を支配する状況に従う」<sup>(7)</sup> ことなのです。彼はこのように弁解した。だがこうした言い訳は、もう何年も前から口にしていたことではないか！彼は『対話』の原稿をソレに預けた。六ヶ月もあれば——この間に何もかも変わってしまうのではないか！旅行には2000ターラー必要だった。おそらくハンヒェンはこう計算したことだろう。この額の半分以下のお金でもあなたと結婚するには十分でしょう、と。だがアウグストは間違いなく「友人なしに」<sup>(8)</sup> 世界へ飛び出して行くのは許されなかった。

4月22日、二人は大慌てで旅に出た。ところが早速、アウグストはフランクフルトで病気になってしまい、二三日の間、この地に足止めされることになった。エッカーマンは再びフランクフルト周辺の自然を目にすることができた。ワイマルはまだほとんど冬だったが、この西部地域ではすでに栗の木や菩提樹や白樺が葉を茂らせ、草も刈られていた。コウノトリが庭に降りてきたし、非常に美しい牛に遭遇することもできた。遠くにタウヌス山地が見え、青い空には白い雲が流れていた。——ビーフステーキもハンブルクで食べた時と同じくらい美味しかった！見本市の雑踏の中で最も印象に残ったのは、犬と猿を連れた、手回しオルガンを弾くサヴォア人の少年だった。共同の食卓ではベテラン給仕長の心理状態が気になった。それは『対話』の中で実に魅力的に描写されている。四日後に、パーゼル、ローザンヌ、ジュネーブを經由してミラノに赴いた。この地に三週間滞在した。アウグストが病気になる度に足止めを食らい、エッカーマンにはこの旅行が苦痛になってきた。だがミラノでは十分休むことができた。ただ『対話』では当地の劇場以外のことは何も語られていない。5月13日、エッカーマンは『ファウスト』の進捗具合についてゲーテに問い合わせた。「誰にも気付かれず、見ず知らずの人達に紛れていても、絶えずスフィンクス場のメフィストのことが念頭にあります。」ゲーテがアウグストを通じて伝えたのは「ヴァルブルグスの夜」を書き終えたこと、そして「これが

ら先、必要となってくるものために最上の希望が残されている」ということだった。そうこうするうちに二人は、プレシア、ヴェローナ、パドヴァを経由してヴェニスへ赴いた。当地には6月8日から23日まで滞在した。ハンヒェンのことは出発してから何も聞いていなかったが、21日、エッカーマンは彼女に宛てて手紙を書いた。「この地にこれほど沢山良いものがあるかなんて想像もできませんでした。毎日感じるのは、私の文化をある意味で完成させるために、そして私を落ち着かせるためにこの地へ来なくてはならなかったということです。」<sup>(9)</sup> 彼がこの旅行に興奮しているような素振りはこの文章からは感じられない。ヴェニスについて語ることもなく、彼女にガイドブックを見るよう勧めている。彼は沢山新しいものを目にして疲れ果てていたのだ。だから『対話』でも、見たもの全てを報告していない。一方でアウグストはさらに旅を続けた。マントヴァ、クレモナ、ローディを経由してミラノへ戻った。ここで少し休憩して、その後ジェノヴァへ赴いた。ロンバルディアの暑さとコレラ感染のせいで、エッカーマンは床に臥せった。

そうこうするうちにコッタが三部作をカプリへ送り届けてくれた。だが残念なことに、バイエルン王ルートヴィヒがそれを受け取ったのはミュンヘンへ帰国する直前のことで、「明確な返答も保留」<sup>(10)</sup> となった。この観点からすればカプリへの旅行はもはや意味のないものとなった。アウグストが奇抜な行動をするので、旅費もひどく搾り取られていた。ゲーテはエッカーマンのことをよく分かっているのだから、アウグストの行動が彼を絶望させているに違いないと予想していた。すでに6月29日には、ゲーテは息子に宛ててこう書いている。「これまでの旅にエッカーマンが満足するようになったら、彼が快適に帰国できるようにしてやってほしい。」<sup>(11)</sup> この手紙がジェノヴァに到着する前に、二人は別行動を取ることで意見が一致した。7月25日、二人はお互いに会わないよう別れを告げた。アウグストは南へ、エッカーマンは北へ旅立った。

8月8日、エッカーマンはジュネーブに到着した。この地は七月革命によって政治的に混乱した状況であったが、その中にエッカーマンは身を置くことになった。それは彼には全く経験したことのないものだった。ジュネーブは避難民で一杯だった。彼はソレの親類と友人を訪問した。ソレの実家では快適に過ごすことができた。ソレの兄弟のニコラスは詩人でもあったが、ニコラスの鉄器類関連雑誌について——ワイマルの『混沌』誌上に「カリプリ」というペンネームでニコラスの詩が載っている——彼は気品ある詳細な文章を残している。また彼は詩人画家ルドルフ・テプファーと知り合いになった。テプファーはボンシュテッテン在住の85歳になるスイス人作家で、パイロンとスタール夫人との体験を語ってくれた。また、後にオットーリエ・フォン・ゲーテの人生に多大な影響を及ぼすチャールズ・スターリングとも仲良くなった。さらに旧友ジルヴェスターとも再会した。彼女は今では故郷で暮らしていた。彼女の案内でジュネーブ湖周辺の素晴らしい風景に親しんでいった。8月15日、ジェノヴァから知らせが届いた。別行動を取ったその日のうちにアウグストが馬車から転倒し、鎖骨を折ってスペツィアにいるという内容だった。彼はそこに行くという返事をしたが、28日、アウグストが回復し、リヴォルノにいるという知らせを受けた。だから彼は帰国の準備をすることにした。だが一体、彼はどこに向かうのだろう？

彼は四ヶ月もの間ゲーテから遠ざかっていた。この旅行で多くの重要人物と知り合いになり、彼ら

の仕事や自信溢れる活動に触れることができ非常に嬉しく思っていた。その一方で彼は目的もなく、ふらふらと彷徨っていた。ワイマルでの七年は彼を内面的に計り知れないほど豊かにしていた。——だが外面的には以前よりも貧しくなっていたのだ。新しい希望を胸に抱いてワイマルへやって来た時の冒険心は今ではすっかり消え失せてしまい、些細な日々の心配事で心身ともに疲れ果てていた。かつて彼は『論集』で注目を集めたが、今では期待を裏切っていた。——『論集』を捧げたゲーテの元にもいなかった。ゲーテに奉仕することで彼は力を浪費していたのだ。貴重な精神的財産を集めることはできたが、今ワイマルに戻れば乞食になってしまう！フィアンセは故郷で彼のことを恨んでいた。何ヶ月も前から連絡が全て途切れ、ゲーテによる手紙の転送もうまくいっていなかった。七年間ゲーテの元において、今初めてエッカーマンはあの圧倒的な印象から自分が解放されているのを感じた。自分の意志を無防備の、忘我の崇敬へと至らしめてしまうほど強力な印象から、ようやく自由になったことが分かったのだ。今では彼は自分を支配するゲーテの眼差しから距離を置くことができた。もうこれ以上曖昧なまま続けなくてもよいことを、今決断しなければならなかった。『ゲーテの対話』を世に出して自分が過ごした年月が無為に費やしたものでないことを、そろそろ世間に示さねばならなかった。

敬愛するゲーテに決定を促すというエッカーマンの決断は、ワイマルからの手紙という形で即座に進められた。ソレの報告によれば、彼の自主性をいくらか保証する「ちょっとしたポスト」<sup>(12)</sup>がおそらく与えられ、大公妃も息子の個人授業が間もなく再開されることを当てにしている、ということだった。ルートヴィヒ王に捧げた彼の三部作については何も漏れ聞こえてこなかった。実際、返事は来なかったし、「賞賛に値する才能」<sup>(13)</sup>の持ち主であるというゲーテの推薦状も全く役に立たなかった。ワイマルは彼に読書博物館レーゼムゼーウムの管理をさせて、うまく追い払おうとしていた。これは——政治的な時代の兆候でもあるが——ワイマルでも設立され、しかも大公妃と侯爵家の庇護下にあった。その際、共和制論者のソレが一役買った。エッカーマンは毎日そこで新聞を陳列し、本を貸す仕事を任せられることになるのだ。——これは彼から時間だけを奪う下っ端仕事である。「何のために生きているのか」という問いは確かに真剣なものである。だが彼は生きるだけでなく、フィアンセに言った言葉を実現させるために結婚したかったのだ。友人のジルヴェスターもワイマルを去るよう執拗に勧めてくれた。しかも精力的に援助することを約束してくれたのだ。これに後押しされて、すぐにゲーテに宛てて手紙を書いた。

1830年9月12日のゲーテに宛てたエッカーマンの長い手紙は、これまで書いてきた中で最も素晴らしく、最も男らしい手紙の一つである。その手紙は『対話』にも収録されている。もっとも、多く箇所でも本質的な変更がなされているが、それは部分的なもので書籍上の体裁のためである。

まずエッカーマンが語ったのは、イタリア旅行が彼に少なからぬ影響を及ぼしたことである。それから話題はすぐに、何年も前から気にかけていた自作のことに移った。彼は、その本が今ではほとんど完成していて、「索具と帆を付ければどうやら進水できそうな新造船」<sup>(14)</sup>のようだと述べた。エッカーマンはこう続けた。閣下もこの『対話』のうちの何枚かに時折目を通して、書き続けるよう何度も励まして下さいました。二巻本にするのに十分な原稿が溜まっています。何ヶ月も前からこんな

ことを考えて全く落ち着きません。ですからローマやナポリの訪問を諦めてしまいました。これほど長期に渡って温めてきた作品が清書段階にありますし、閣下<sup>15</sup>に出版を許可していただけなければ、私は完全に自由の身になって心軽やかにはなれません。エッカーマンは『対話』に収録されたこの手紙の中で、イタリア旅行の思い出を報告している。だがその多くは後で付け加えられたものである。例えばジュネーブの政治状況がそうである。それに対して、年がら年中ワイマルで悩まされねばならなかった「破壊的で引きずり下ろす関係」<sup>(15)</sup>について敢えて書くことはしなかった。来年をどうやって暮らしたらよいか、私にはこの三ヶ月の間全く分からないでいました。若いイギリス人達に授業をするのも、大部分は「非常に嫌な仕事」<sup>(16)</sup>でした。そのような「贅沢な暮らしをしている若者達」<sup>(17)</sup>の態度は、たとえ意識していなくても、教師である私よりも自分達の方が立場が上である、と感じさせるものだったからです。少しでも折り合えるように彼らの個性に順応してきましたし、自分の個性を諦めねばなりません。それは長い間、私の精神、性格、意志に悪影響を及ぼさずにはいられていませんでした。自分のためにこうした状態へ戻りたくはありません。読書博物館のポストも「宮廷と貴族の間」<sup>(18)</sup>にいることですし、私には相応しくありません。出生や教育、そして幸福な人間関係に由来する圧倒的な自信というものが、この職務をこなす上で欠けています。その職に留まっていれば、自分が責任感の奴隷だと感じるだけでしょう。その責任感は私に生活基盤を与えてくれる代わりに、私という存在から感情を奪ってしまうに違いありません。私の生活はワイマルで行き詰ってしまいました。ですから再び「新しい道」<sup>(19)</sup>を進まなければなりません。そのためには場所を変える必要があります。私はノルトハイムで本の最後の仕上げをして、閣下から学んだことで読者を獲得し、「新しい競争相手」<sup>(20)</sup>や、さらに勉強する機会を見つけられる町へ行ってみたいと考えています。それが一番望んでいることです。例えばベルリンのような町へ行ってみたいと思います。また時々ワイマルへ戻って、閣下の元で「自己修正」<sup>(21)</sup>し、自分の作品に取り組めたらと考えます。こう彼は手紙を認めた。とりわけ彼が毎日のように感じていたのは—— したた た ても政治的な時代の特徴が現れている—— 歴史認識の不足であった。『対話』には、1824年、ゲッティンゲンでヘーレン教授から歴史学を学んだことが記されているが、教授から学んだことを当時彼はすっかり忘れていた。彼はこう続けた。これらの計画を実現するための前提は、私の本をすぐに出版することです。その上、体も弱っていますし、「余命が長いとは」<sup>(22)</sup> 到底思えません。ですから「しばらくの間でも私の名前を人々の記憶に留めておけるような、堂々とした仕事を何とかして残しておきたいのです」<sup>(23)</sup>。閣下の同意がなければ、もちろん私は何もできません。私が次に向かうフランクフルトで閣下の御決断をいただければと思います。

こうした状況下で『対話』の出版を禁止することなどゲータに考えられたらどうか？ 『対話』を出版することによって今後の生活基盤を固めることをエッカーマンは期待していたが、ワイマルはそれを用意しようとしなかったし、またそうすることもできなかった。彼は自らの生活を再構築しなければならなかったが、他の人からの僅かな好意によってではなく、自分の手で作り上げようとした。彼の下した決断が実行不可能となれば、ようやくワイマルは彼のために何をしなければならなかったか思い知ることになるだろうし、少なくともこれまでよりも相応しい方法で、彼に自由が自然に与え



られるようになるまで支援してやる必要があるだろう。9月17日のソレ宛ての手紙の中で、彼は読書博物館のポストを短い言葉で決然と断っている。「ワイマルに根を下ろすつもりはありません。私は文学的キャリアを積んでいこうと思います。殿下が寛大にも私に好意を示して下さいれば、私の最初の一步を支えてくれるかもしれません。皇太子のことは好きですし、将来的にどこかで御一緒できるのであれば、喜んで皇太子に尽くすつもりです。」<sup>(24)</sup> これは実に気の利かない釈明である。というのも、もし彼が大公妃のお金を「異国の地」で使い果たし、単に将来的に皇太子に尽くしたいというのであれば、どうやって大公妃から支援を期待できるというのだろうか！

ゲートへの「重々しい告白」<sup>(25)</sup>の後、エッカーマンはなおも一週間ジュネーブに留まった。悪天候で外出できず、体調も優れなかった。知人とも会わないようにして、世捨て人のように暮らした。ひょっとして彼は決断を急ぎすぎたのだろうか？ 9月21日、彼は別れを告げることもなく、突如ジュネーブから姿を消した。28日、シュトラースブルクに到着した。床屋の前を通りかかった時、その窓に乳白ガラス製のナポレオンの胸像が目に入った。それはこれまで見たことのない完璧さで、黄と青の色合いを帯びていた。この胸像を持ち帰ればゲートもきっと喜んでくれるだろう！ 彼は思い切って店の中に入り、数グロッシェン支払って胸像を手に入れた。これをゲートに送ることができて彼は大喜びだった。自分の選定眼に少し誇らしい気分だった。このガラス像は無傷でワイマルに届けられた。ゲートはそれを書斎の机の上に置いて、「太陽が昇ってくる方向に向けた。」<sup>(26)</sup> それは今日でも見ることができる。これで「世界一周しただけの価値がある」<sup>(27)</sup> とゲートは友人のツェルターに述べているほどである。

10月6日、エッカーマンはマインツに到着した。9日にはフランクフルトに到着し、この地でゲートからの手紙を受け取った。緊張しながら手紙を開封した。——それは当面の返事にすぎなかった。差し当たりフランクフルトに留まりたまえ。読書博物館のポストはあなたに相応しくないだろうと私も予想していました。また、この件に関しては少なからず顔が利くのです、とゲートは付け加えた。

10月10日、すぐにエッカーマンはフランクフルトに到着したことをゲートに伝えた。だがジュネーブで手紙を書いた時の揺るぎない意志の強さは一体どこにいったのだろうか！ ゲートの筆跡という目に見える印に魔法をかけられ、屈服してしまったのだろうか？ ゲートはエッカーマンが意図的にワイマルから離れたことに対しても、またワイマルに引き留めておこうとする諸々の尽力に対しても、一言も遺憾の意を口にしなかった。ゲートの文面に見られるこうした飾り気のなさに、彼は幻滅して愕然としてしまったのだろうか？ 確かにエッカーマンは依然としてノルトハイムへ行こうとしていたのだが、実際はゲートの言いなりだった。ゲートが『対話』を出版することに同意してくれれば、すぐに印刷に回せるよう預けていた原稿をソレに送ってもらうつもりだった。だが、もしゲートがすぐに出版することを望んでいなければ、当分の間、彼はこの作品を整理するつもりでいた。その一方で、ゲートの意向に逆らっても、これを「極めてささやかなもの」<sup>(28)</sup> にするつもりはなかった。いくらお願いしてもゲートは出版に賛成してくれないのではないかと、そう彼は独り言でも言っていたのだろうか？ また、そんな事態になることをすでに受け入れていたのだろうか？ お前の居場所はゲートの所にあつて、それをこの世で永遠に手放してはならない、という考えにまたしても襲われて、安

堵して溜息を吐いたのだろうか？ ゲーテがすぐに寄こした 10 月 12 日の返事は、事実、10 日付けのエッカーマンの手紙を先取りしたものだ！ ゲーテの返事は親しげな文章から始まってはいるが、冷静で事務的なものだ。「あなたがノルトハイムへ行って、しばらくそこに滞在したいと望むなら、私も反対しません。静かな時を過ごして、ソレの手元にある原稿に手を加えるつもりなら、ますます私には有難いことです。私はそれをすぐに出版することは望まないで、一度あなたと一緒に目を通し、手を加えてみたいと考えています。それが私の考えをありのままに伝えていと納得できれば、その価値も高まることでしょう。これ以上は言えないし、後はあなたにお任せして、後便を待つことにします。」<sup>(29)</sup>

決定はこのように下されたのだ。つまり、ゲーテが死ぬ前に『対話』を出版することは考えられないということなのだ。だがゲーテがこの原稿に目を通して、「私の弟子が君たちに伝えるのは私の言葉だ」ということが納得できるよう「手を加える」と約束してくれたのは、エッカーマンにとって極めて大きな意味があった。ワイマルを離れるだって？ 今になってみれば、そんなことは彼には馬鹿げたことに思えた。ハンヒェンの機嫌を損ねたくはなかったので、ノルトハイムを訪問することは避けられなかった。だが彼の「心は再びワイマルに」<sup>(30)</sup> あったので、ソレに自分の「奇妙な行動」<sup>(31)</sup> を詫言て、すぐに帰って皇太子の授業を再開し、しばらくの間そうやって「ある種の収入」<sup>(32)</sup> を得ようとした。21 日付けのゲーテへの返事は歓声のようだった。つまり、ゲーテの鶴の一声が「完全に自分の願いに一致」<sup>(33)</sup> していたので、すぐにゲーテの元に駆け付けること以外何も望まなかったのだ。こうして彼は再びゲーテの影響圏に留まることになるのだ！

10 月末、ノルトハイムに到着すると、ワイマルからの手紙が彼を待ち受けていた。それがハンヒェンとの気まずい話し合いを和らげてくれた。この手紙に記されていたのは、エッカーマンが帰ってきたら皇太子の授業が本格的に開始され、少なくとも 30 ターラーの月給が支払われることになる、ということだった。幸福がこれまでよりも優しく微笑んでくれるのだろうか？ そうなれば彼は結婚できて、全てがうまくいく。二週間後、彼はワイマルへと旅立った。

そうこうするうちにゲーテはナポレオンの胸像を受け取っていたが、礼状をノルトハイムへ送ってはいなかった。<sup>(34)</sup> この発送されなかった礼状には、この夏、エッカーマンが戦い抜いてきた葛藤を的確に表現する言葉が記されていた。「あなたのデーモン悪魔があなたを再びワイマルへと導くのであれば」<sup>(35)</sup> という言葉である。— ある種の人物が口にする言葉は「魔術的な作用」を及ぼすものであるが、二人で話している時にこの言葉が一体何度現れてきたことだろう？ 僅かな選ばれた人間に運命を割り振っていくという、悪魔的で威圧的な力への信仰の中に、この二人は何度となく自己を見出していたことだろう！ エッカーマンの悪魔は、彼が何年も前から「友人」と呼ぶことを許されていたゲーテその人であった。エッカーマンの悪魔たるゲーテは根本存在であって、その創造的な力が彼に受け継がれ、『ゲーテとの対話』が形作られていくのである。エッカーマンはこの時以来、決定的にこの悪魔の虜となっていった。

11 月 21 日、エッカーマンはワイマルへの途上、ゲッティンゲンに立ち寄った。この地で驚くべき知らせに見舞われた。10 月 26 日、ローマでアウグスト・フォン・ゲーテが脳卒中で亡くなったのだ。

23 日午後、エッカーマンはワイマルに到着した。彼が最初に赴いたのはゲーテの所だった。七ヶ月前、その息子に同行してエッカーマンはイタリアへと旅立っていた。だが今は一人で戻って来たのだった。打ちひしがれた一人の老人を目にするのを彼は覚悟していた。「というのも、ゲーテも私達と同じ思いであろうと考えた」<sup>(36)</sup> からである。ルイーゼ大公妃の死後ゲーテと向かい合った時に「まるでこの地上の苦しみに少しも動じない、遥か高次の存在のよう」<sup>(37)</sup> であったことを、エッカーマンは 1830 年 2 月 14 日の日記で述べている。今回も同じ悪魔的な力が働いて、ゲーテは一人息子を失った苦しみを耐え忍んでいた。エッカーマンは次のように述べている。「ゲーテは直立し、私を抱き締めました。彼は快活そのもので落ち着き払っていました。私達は腰を下ろし、如才ない話をしました。再びゲーテの元にいることができ、最高に幸せな気持ちでした。(…)しかし息子のことには一言も触れませんでした。」<sup>(38)</sup>

## 18. ゲーテの遺志

1830 年 11 月末にワイマルに戻って来て以来、エッカーマンはゲーテが死ぬまでその元を離れることはなかった。距離を置こうとも思わなかった。異国の地を長期間に渡って旅をして再び心の落ち着きを取り戻し、もう一度力を発揮できる自信が湧き上がってくると、今度は自らの手で幸福を築き上げようとした。再びドイツの空気を吸うと抗う気持ちは消え失せてしまい、ワイマルとの磁石のような関係も日に日に強くなっていった。ゲーテが呼び寄せてくれたので、自分では対処できないと思っていた重荷から解放されたかのように彼は巨匠の元に逃げ帰ってきた。それはこの地で安堵の息を吐いて「私はここにいるのだ、ここに留まるのだ！」と歓声を上げて心の内を吐き出すためだった。何年もの間、彼は自分自身の人生を充実させることが掛け替えのないことだと感じていた。それが今では——最後の数ヶ月の戦いでそのことが彼には分かったのだが——自分の人生そのものが掛け替えのないものとなったのだ。世界がまだ彼とともに思い描いていたもの、そして彼が世界から期待したかったもの、そういったものは全て茫漠としたものとなって、高貴な使命の背後へと消えていった。彼はその使命を自分自身の人生の課題だと感じた。その人生の課題とは、息を引き取るまでゲーテの傍らで辛抱し、取るに足らない自分の運命をこの孤独な詩人のために犠牲にして、自分の僅かばかりの力をこれまでよりも献身的に捧げ、時間のある限りこの比類ない人物を将来描き出すために深く心に刻み付け、女性からの愛や文学的名声では絶対に埋め合わせできない幸福を享受することであった。こうして彼は『ゲーテとの対話』の創造者となっていくのである。『対話』では詩的な直感を研ぎ澄ませ、かつて自作の詩ではうまく表現できなかったことを全部描き出すことができた。この作品の中で、ゲーテは謙虚な弟子を祝福するために弟子の頭に手を当てがったのだった。

その後一年半に渡るエッカーマンとゲーテの付き合いは、これまでよりも活発で豊かなものとなっていった。1831 年のゲーテの日記には、200 回以上エッカーマンの訪問が記されている。実際にはもっと多かった。それはエッカーマン自身の日記からも明らかである。ゲーテがこんなに頻繁に——日常業務を除いて——エッカーマンと話をしたことはどんな年にも見られないことだった。また、エッカー



マンとの対話の価値をゲーテがこれほど強調したことはどんな年にも見られないことだった。だが一つ驚くべきことがある。つまり、エッカーマンの帰国後、彼の本のことは一言も話題に上がっていないのである！確かにゲーテは彼と一緒に原稿を仕上げて「手を加える」<sup>(39)</sup> ことを文書や口頭で約束していたのだが、ゲーテは外面的には平静を装いながらも息子の死によって突き刺すような苦しみを味わっていた。ゲーテは最奥の生命力を揺さぶられ嗜血した。1830年11月には回復したが、その後ではゲーテも「今後のこと」<sup>(40)</sup> ラントフリーデン が心配になってきた。ゲーテの遺稿を確保しておくためにも、やらなければならないことが依然として山積していた。だから『対話』の編集のことなど考えられなかったのだ。エッカーマンは次のように独り言を述べている。「私としても、これまで書き溜めてきたものに関わっているよりは、幸運が微笑む限り、できる限り新しい対話を加えて蓄積を増やしていくことの方がよっぽど賢明だと思います。」<sup>(41)</sup> こうは言っているものの、彼自身はこの決定を投げやりに実行した。彼は意気消沈していた。ゲーテは最後の力を振り絞って様々な仕事に取り組んで、それに協力者たるエッカーマンがほぼ毎日関わり合ったが、それによって自分の時間がなくなっていく一方だったからである。12月初旬、ゲーテはエッカーマンに『ファウスト』の原稿を読むよう促した。12日、「この作品の中でエッカーマンが理解できなかったことについて話し合い、最終的な筆入れをすることにした」<sup>(42)</sup>。エッカーマンが極めて積極的に関与して、夏までにこの作品をゆっくりと仕上げ、最後に第五幕の開始部分を終えて、8月には原稿を完成させ封をする、ということになった。それと並行して、往復書簡の整理と校閲も進められた。往復書簡の出版に合わせ、エッカーマンは項目作成にも取り組んだ。3月、『詩と真実』の未完部分が話題になった。この作品に「もう一度真面目に着手すべき」<sup>(43)</sup> というエッカーマンの非難にゲーテも納得した。二三ヶ月後、基本的な部分でのエッカーマンの変更提案が実行に移された。仮にそれが丸ごと緊急用の屋根という意味合いを帯びていたにしても、ある程度の完結を迎えられたのは、エッカーマンの熱心な説得と介入のお陰である。ゲーテ自身もそのことを何度も賞賛している。

この81歳の詩人は気力を振り絞り、自身の身辺を整理し始めた。つまり文学的・法律的な意味での遺言状を作成したのだ。1831年1月20日、ゲーテはエッカーマンを遺稿の編集者に指名した。3月15日には特別な契約をして、出版者が相続人に支払う総額の5%をエッカーマンの報酬とすることにした。6月10日、エッカーマンは遺稿原稿の入ったトランクの鍵を受け取った。トランクは大公妃図書館に保管された。また「安い報酬」<sup>(44)</sup> と引き換えに、エッカーマンは将来の往復書簡集出版の編集者に指名された。ゲーテの文学的遺産はエッカーマンに託されたのだ。「所見と必然性に従えば編集を続ける」<sup>(45)</sup> 権利が彼にはあったからである。またゲーテはエッカーマンの遺産が5%であることを慰めようとして、コッタがこれまで最終校訂完全版全40巻に支払ってきたよりも高い報酬を、どうすればこの遺稿を使って手に入れられるか助言している。

ゲーテの遺言は、エッカーマンに対する無比の関係を表わす堂々たる最終決定である。だがそれはエッカーマンには差し当たりまだ先の話であって、現在の苦境にはほとんど役立たなかった。結婚式を挙げる日をもどかしい思いをしながら待ち望んでいたフィアンセも、今ではそのことに鋭い視線を向けていた。彼は11月には少し性急に彼女の元を離れてしまっていたが、それはお互い理解した上

での別れであった。彼は自分の生計を確保すること以外何もしない、と本気で考えていた。だが帰国前に考えていた素晴らしい見通しも、今では色褪せ始めていた。今後、皇太子の授業があるのかどうかも差し当たり分からなくなっていた。父親が臨終の床にあったために、ソレがジュネーブに行ってしまったからである。エッカーマンは大急ぎで新しい生徒を探し回った。彼は今では幻滅することに慣れてしまっていた。ゲーテは彼が最終的な就職先を見つけることを当てにしている、毎日宮廷に出入りする高い身分の貴族を訪問するよう助言した。「あなたは宮廷一家の一員として振舞わねばなりません」<sup>(46)</sup>とゲーテは述べた。「そしてこの特権を使って財産を築かねばなりません。」<sup>(47)</sup> エッカーマンはこの忠告に従って名刺を作成した。だがその名刺には、彼がこれまでどんな経験をしてきたか何も書かれていなかった。宮廷顧問官ソレが12月20日に戻って来ると、大公妃が将来エッカーマンのポストをどうするつもりであるか、ありのまま教えてくれた。その話によれば、彼は決して「宮廷一家の一員」ではないということだった。月給と時々もらえる謝礼ではもう絶対に引き下らない、そう彼は固く心に決めていた。だが夏の間慣例となっていたイギリス人生徒用の授業が中断されることになれば、彼の生活基盤を保証する確実な年収をソレも実現させてやれなくなってしまう。それでエッカーマンは結局、週に四時間、皇太子に授業をすることになった。英語を二時間、ドイツ語を二時間、「少しだけ文学」も教えた。授業の題目と形式についてゲーテと詳細に吟味した。だがその他の点では全て以前と同じだった。つまり授業が催されれば、エッカーマンは月々約束の30ターラーを受け取るようになったのだ。良かれ悪しかれ、彼はこの「慈悲深い指示」に満足しなければならなかった。一方でハンヒェンは激怒していた。彼女の忍耐も限界だったのだ。この「貧乏国家」<sup>(48)</sup>と良い加減に縁を切って即座に大公妃との契約を取り消し、友人のジルヴェスターが差し伸べてくれた援助を受け入れて、自分の決心を8月から実行に移すよう決然と忠告したのだ。その決心とは、ベルリンへ行って独力で文学の世界で運を試すということだった。そうしなければあなたは勤め口も見つからないし、独り立ちできないわ、と彼女は述べた。彼女はもはや彼のことが全く理解できないでいたのだ！「いつも様々な状況や事情が邪魔してくるのですね。その中にゲーテがいて、もうどうにもならないのですね」と彼女は怒りを露わにして非難している。「要するに本当のことを言ってしまうと、あなたが何をしたいのか私自身にもさっぱり分からないのです。仕事が見つければあなたは困ってしまって、自分自身の仕事に全く、あるいはほとんど取り組めないというわけですね。あなたの唯一の慰めは今でも対話録なのでしょう。だったらそれを続けて、思いっきり取り組んでみればいいわ。この前の手紙でも、もうそうしていると書いていましたね。ゲーテの手紙に埋もれて仕事をしていればいいんだわ！いつもそのことばかり言っていますね。あなたはもう戻って来ないつもりなんだわ。」<sup>(49)</sup>

このような怒りを露わにした手紙をエッカーマンが読まなければならなかったちょうどその頃、ゲーテは彼を遺稿の編集者に指名した。だからエッカーマンは興奮したフィアンセに、少なくとも彼女が納得してくれるに違いない事実を伝え弁解したのだった。だがハンヒェンは態度を緩めず、同じ調子でこう述べた。「では、あなたは今ゲーテと協力して、彼の立派な手紙の編集に取り組んでいるというわけですね」と彼女は2月2日に書いている。「あなたが対話録を書き進めて、この作品があなた

に名声と富をもたらしてくれることの方が私にはずっと良いことです。そう告白せざるを得ません。(…)ゲーテがこの作品を称賛してくればきっと有利に働くでしょう。ゲーテが熱心に働きかけてくれればですが。(…)その後であなたが公妃に提示するつもり条件について、私にも一度教えて下さい。公妃が一人、ゲーテの所に駆け寄って、あなたのために何かしてくれるよう頼む姿を私も一度見てみたいものだわ。」<sup>(50)</sup> 大公妃もエッカーマンのために何かしてくれるようゲーテに働きかけてくれた。だがゲーテはエッカーマンの将来を宮廷に押し付けようとしていた。エッカーマンはハンヒェンに促されて、悲嘆に暮れて日々を過ごしていることをもう一度詳しく説明すると、ソレが彼のために少なくとも二年間、授業で確実な収入が得られる道を切り拓いてくれたようである。だがエッカーマンはこれほどまでにひどい仕打ちを受けて、心に深い傷を負った。

2月10日になってようやく奮起して日記を書き始めた。それは次のような言葉で始まっている。「長きに渡る精神的抑圧と肉体的な不快感の後で、ようやく私は再び自由を感じ、人生の希望を抱き始めています。」<sup>(51)</sup> 彼はイギリス人生徒への授業を再開した。その日の心配事もなかった。一方でハンヒェンはひたすら彼の将来のことを考えて、全てに不信感を抱くという状態だった。「ゲーテの書簡集が次々と出版されるのですか？ それともゲーテが死んでからそうなるのですか？」<sup>(52)</sup> と彼女は2月2日に彼に問い掛けている。「だったら、永遠にそれを待たないといけないのですか？」<sup>(53)</sup> 彼女が即座に感じ取ったのは、ゲーテの遺言が好ましいものではないということだった。つまり、ゲーテが死ぬのは間違いないが、遺稿集が完成して報酬が支払われるようになるまでは、きっと何年もかかるに違いないのだ。もしコッタが前払いをしてくれなければ、エッカーマンは1ペニヒもらわないで仕事をしなければならなくなる。遺稿の大部分を押さえておくということ、相続人や後継人、または出版社が認めてくれれば、エッカーマンもそれ相応に我慢できるに違いない。彼女は計算を始め、全報酬の5%がどれくらいになるか尋ねた。その質問は明らかに不快なものであったが、彼は少し怒りを露わにした後で約800ターラーだと答えた。エッカーマンに対するゲーテの愛情からすれば、この額はほとんど相応しいものでないとハンヒェンは感じ取った。エッカーマンはこうした事務的な事柄によって、ゲーテへの忠誠と心服を変えることはなかった。彼はハンヒェンほど挙手を急いではいなかった。だから5月には二人の間に亀裂が生じてきた。そんな状況であっても実際に自分が真面目に結婚を考えていることを示さねばならなかったし、ハンヒェンが自分の少しばかりの財産を年末には自由に使えるようになるので、彼の方でも結婚資金を工面しなければならなくなった。この時も彼は苦い経験をした。友人のジルヴェスターが彼に工面してくれた資金は、あるイギリス人が手にしていた。そのイギリス人はこの貸付金を返すことになっていたが、連絡も取れなくなっていた。工面できなくなった利息に対して、ハンヒェンが別口でお金を調達してくればよかったのだが。

夏にはエッカーマンの授業でイギリス人生徒がいなくなってしまった。8月10日、ようやく生徒が二人見つかって、ゲーテは相当喜んだようである。結婚式については話題に上らなくなった。最終的には11月に結婚式を挙げるのができたのだが、少なくともそれは友人エッカーマンのためにソレが大公妃から得ることのできた支援の一つと言えるものだった。

ゲーテは自分の協力者の個人的な案件に全く関心を示さなかった。彼は自分の最後の著作物に手一

杯で、毎日、仕事内容の限度を設けていたほどだった。エッカーマンはこういった事情を理解し、その価値を認めていた。だから自分ことは言い出しづらかった。1831年7月13日、ハンヒェンが「結婚についてまだゲーテと話していないのですか？ 話したくないのですか？」<sup>(54)</sup>と疑い深い質問を投げかけてきた。それは間違いなく核心を突く質問だった。エッカーマンはぎりぎりになってようやく決心して、きっとゲーテにとっては面倒であろう個人的案件を切り出すことができた。いずれにしても、それはやっと9月14日になってからのことである。ゲーテはこの日の日記に、友人の「間近に迫った変化」<sup>(55)</sup>について書き記している。それは彼の結婚のことを指しているが、「結婚」という言葉はゲーテの日記のどこにも見つけることはできない。エッカーマンは11月17日に初めて、その後も何日間か、新婚旅行——ゲーテは「帰郷」<sup>(56)</sup>と言ったが——に出たいと迫った。確かにゲーテは旅行をして見聞を広めることが「現在の心の動きの一瞬、性格、心情にとって重要である」<sup>(57)</sup>（11月20日）と考えていたが、実に気まずい沈黙が漂った。ハンヒェンが楽しみにしていたのは、エッカーマンの崇拝する「偉大なゲーテ」<sup>(58)</sup>とようやく対面して、ひょっとしたら——それは不遜なことだろうか——話しかける価値があると認められることだった。だが彼女が経験したのはひどい失望だった。確かにゲーテは善良なエッカーマンが少なからず自慢してくれたので、絶えず明るい調子で「彼女によくお伝え下さい」と言いはした。だがゲーテは自宅で彼女と会うことは一度もなかった。死去の三週間前の1832年2月29日の日記にのみ、極めて簡潔な記述が残されている。「12時、オッティエリエの所にいるエッカーマン博士夫人を見た。」<sup>(59)</sup>ゲーテにとって彼女はその他の人でしかなかったのだ。「エッカーマン博士とまた食事」<sup>(60)</sup>と11月18日の日記に記されており、これまでと同じように「お昼、エッカーマン博士」ということが続いていった。エッカーマンの結婚はゲーテとの関係に全く影響を及ぼさなかった。最も身近な協力者であり友人の「変化」に思いを巡らすことなど、もはやゲーテにはできなかった。

自分の将来を決定するに違いない人生の一時期、つまり31歳から40歳までの遅咲きの発展の時を、エッカーマンは間違いなくゲーテのために犠牲にしてきた。だがゲーテは彼のためにほとんど何もしてくれなかった。それをハンヒェンはどうしても理解できなかった。そう思ったのはハンヒェンだけではない。ワイマル上級宗務顧問官ポイツァーも「ゲーテにいつも欠けていたのは意欲と活動における決然とした態度」の不足である、と見なしている。エッカーマンという「哀れな奴」<sup>(61)</sup>に対するゲーテの態度を最も痛烈に非難したのは、一番近くにいた観察者ソレである。1831年11月17日のカロリーネ・フォン・エルゴフシュタイン宛の手紙の中で、彼は次のように述べている。「あの偉大なお方はお金を使うのが好きではないのです。あの方の近くにいるという名誉がきっとターラー銀貨の代用となるのでしょうか。あの方はある意味で焼き肉の匂いだけを彼に嗅がせているのです。」<sup>(62)</sup>1832年1月27日にツェルターに書いているように、ゲーテは「善良な人達の生計を少なくとも一年分確保する」<sup>(63)</sup>という試みを、最後の最後になって恐る恐る行っている。まさにその事実が、ゲーテ自身、エッカーマンの悲惨な財政状態を目にしていたことを物語っている。この手紙の中でゲーテが意図していたのは、エッカーマンとその妻のことである。——ちなみに手紙の中でハンヒェンの存在について示唆したのは、これが最初で最後である。その前日、ゲーテは大公妃に報告書を口述筆記させた。

その中でゲーテは突如、「総監督業務」におけるエッカーマンの協力を褒め称え、大公室と総監督からそれぞれ 100 ターラーの「特別給与、または一時的な援助」を与えてほしいと頼んだ。ゲーテは次のように率直に告白した。それは本来とくにすべきことでしたが、そのような補償金が認められる「項目」がこれまでありませんでした。また私は「公的な費用」を支払って個人的な協力者に報いるという体裁を避けようとしてきました。ですから、むしろこの報酬を「少なからぬ犠牲的行為」によって自腹で引き受けてきたのですが、実際のところエッカーマンが授業をすることで切り抜けてきたことを認めなくてはなりません。これはエッカーマンに関する最初で最後のゲーテの職務上の報告であるが、ここに力強い説得力は認められない。エッカーマンをワイマルに「受け入れる」という、1831 年以降、大公妃によって何度も言及された要望をゲーテは引き合いに出して、イニシアチブを宮廷に押し付けてしまっている。そうすることによって、それがどんなに気まずいものであろうと、予算上、友人の雇用は「実現可能でもないし得策でもない」と考える自身の目的に到達したのだった。エッカーマンはゲーテの死後すぐに、つまり 1832 年から 1833 年までの復活祭に分割払いで 200 ターラーを受け取った。この年をまるまるゲーテ関連の仕事に捧げねばならなかったにも関わらず、彼はこのような方法で国からの補助金を受け取ったのだった。その一方、ゲーテの遺言で、この困難な過渡期に彼には何も遺贈されることはなかった。

ゲーテに捧げたエッカーマンの人生そのものを価値あるものと認めたくても、財政的に冷静な判断を下されるのは避けられなかった。この「忠実な友人」自身は、このことがゲーテに対する関係に暗い影を投げかけないように注意していた。だが財政的に冷静な判断を下されるのは彼の意に沿わないことだった。だから将来が見通せないにも関わらず、自分に運命を託している妻のためにも、そして自分自身のためにも、ゲーテの死ぬ半年前に勇気を振り絞ってお願いする大胆さが彼にあってよかったのかもしれない。

## 19. 締め

### エッカーマンの手紙と日記から

#### アウグステ・クラーツィヒ宛 (1830 年、クリスマスイブ)

我が最愛のアウグステ！ あなたと話せてこの上なく幸せです。本当に素晴らしい時間を過ごせました。というのも、ほとんど絶望していたからなのです。あなたにお目に掛かるという強い希望を抱いて、夕暮れ時にたっぴり一時間あちこち歩き回っていました。こんなにも沢山の人が、こんな時間に行き来して買い物をしていました。——でもどうして彼女も外出していないのだろう？ 私はそう思いました。遠くにあなたぐらいの身長の人が見えると、いつも「彼女に違いない」と思ってしまいましたが失望ばかりでした。あなたと頻繁に会っていた頃のことを思い浮かべていました。実際、あなたに会いたいと大真面目に考えていましたが、今ではそれも叶いそうになく、私の想いは揺らぎ始めていました。私達の精神的な関係はどんな所でも成り立つのではないかと思っていたのです。それ



から私は再び自分自身と、偶然的なことに対する私の過大な要求を詰りました。一万人の住人がいる中で、あなたと出会うのを熱望している自分を詰ったのです。その時はまさにそんな気持ちでした。しかしその後、予感めいた情熱という激しい感情に襲われました。哀れな人間があらゆる精神的な環境や作用を与えられることもなく、一人ぼっちで地上に取り残されているのに、高貴な存在がそんな人間を気に掛けることもなく関与しないことなど私には考えられなかったのです。私の信念が再び目を覚ました。私は思考と感情の力を動員して、目に見えない霊の好意を私の歩みの管理下へ引き寄せようと思いました。するとどうでしょう。本気でそう考えていると願いが聞き入れられたのです。天から送り出されたかのように、あなたは私の目の前に立っていました。私は幸せでした。八ヶ月の間会えずにいたのに再びあなたの手を取って、慣れ親しんだ声の響きを耳にすることができたのですから。私は満ち足りた気分で楽しい休暇を過ごしていますし、一週間もあれば十分です。

今朝、薔薇色の詩集を読んでいました。クリスマスにあなたの所に行こうと思っていましたが、まだ完成していない詩が沢山ありました。この本をまだ手元に置いておいて、(欠けている詩を)いくつか書いてみる方がいいだろうと思います。<sup>(64)</sup>

日記 (1831年2月10日、木曜日)

劇場で生徒のおふざけ (アンゲリーによって)。平土間に座る。アウグステを見て嬉しかった。彼女は何度見てもとても魅力的だし、何度か私の方を見てくれた。<sup>(65)</sup>

日記 (1831年2月19日、土曜日)

夕方 (ロッシーニの)『ヴィルヘルム・テル』。(…)アウグステは今日もとても美しかった。私の眼差しはいつもように彼女に釘付けだった。この女性への不屈の愛が私の中にあるのが分かる。彼女を家まで送って手に口づけしようとする。だがそうしないでおく。抑制した方がよいと後になって分かるからだ。だが夜になると何時間も夢の中に彼女が現れて、私に手を差し出してくれる。私はたつぷりと唇を押し当てる。

日記 (1831年2月21日、月曜日)

シュヴァン湖に散歩。ようやくアウグステと会えてとても幸せだった。宮殿の近くで振り返ると、背後に彼女が立っていた。彼女が言うには、咳払いをして私を呼んだが、私はそれを聞いておらず、ずっと彼女の前を歩いていたというのだ。やっと追いつけた、と彼女は言った。私達二人は手を取り合って喜んだ。こうしてまた彼女の可愛らしい顔を見ることができてとても幸せだった。彼女が言うには、今、エーバーヴァインの所からやって来て、『白衣の婦人』で役をもらって稽古中ということだった。歩いていると彼女の靴紐が解けた。劇場の近くに来ると、中に入って靴紐を縛るよう提案した。彼女は階段に足をのせて靴紐を結んだ。私はドアの前に立って彼女を待った。それから彼女は私を劇場の裏へ連れて行き、クードレーの家の前まで行って、そこで私達は心からの眼差しを交わし、手を握り別れた。(…)『テル』の稽古が沢山あったために役の勉強が行き詰っていると彼女が話して

くれた。また手紙を書いてほしいとしつこく頼んできたので、そうすると約束した。私はこの素敵な出会いを一日中喜んだ。何らかの愛情によって自分の行動が制限されるのは嬉しいことなのだと思います。

日記 (1831年2月25日、金曜日)

アウグステのことを考えている。人間の中の最の素晴らしい思い出とは何ともあやふやなものだ。何かを飲んだり食べたりして元気を回復するみたいに、幸せだった時のことを思い出して元気を取り戻したいと思う。私はその代用品として去年の日記を読む。色彩に関して彼女が非常に利発的なコメントをしていて嬉しくなる。彼女の類いまれな精神が進展していないのは残念だ。彼女の精神はその能力も備えているというのに。しかし良い精神の持ち主であれば、どんな環境にあっても好機を捉え、様々な形で自分を鍛え上げ、この世の森羅万象に気付いていくものだ、という言葉で自分を慰めている。

アウグステ・クラーツィヒ宛 (1831年2月26日、土曜日夕方)

先程、色彩に関するあなたのコメントを読み返したところです。あなたの素晴らしい観察眼に改めて嬉しくなりました。観察したことを上手に明瞭明快に表現しています。劇場用のちょっとした本を私と書いてみるというアイデアを、あなたは去年出してくれましたね。まだ覚えているでしょうか？色彩関連で追加するものをメモしていないのですか？私にすぐにそのようなことを報告するおつもりはないのですか？私としては、もう一度あなたと別の形で親しい関係になれてから、結婚できればと思っているに過ぎません。昨夜、夢を見ました。ハンヒエンがワイマルに来て、あなたを訪問したのです。私が通りに面したドアの近くに立っていると、彼女があなたと一緒に上から降りて来ました。あなた達二人は私の傍らを通り過ぎて行きました。あなたは私を見ました。私が近くにいることを悟らせないよう、あなたに目で合図を送りました。あなたは彼女と連れ立って劇場を見せに行きました。私は家のドアの後ろに身を隠しました。これは可笑しいことでしょうか？あなたのことをどれほど考えているか分かって下さるでしょうし、半分あなたのことを忘れようとしている兆しでもないことはお分かりのはずです。そんなことは断じてありません！

アウグステ・クラーツィヒ宛 (1831年3月2日、水曜日)

今晚、劇場に行くのを楽しみにしています。遠くからあなたを見られるわけですから。機会があれば、あなたの母上にこうしたお手紙を差し上げます。薔薇の季節が来ましたので、すぐに温室をいくつか回ってみて、鉢を少しばかり買ってみるつもりです。何か心地よくなるものを部屋の中に置いて見ておけますから。あなたのお花もまだ枯れていませんか？ではお元気で。先日、あなたに会えてとても嬉しかったです。

日記 (1831年3月5日、土曜日)

市場でアウグステに会った。天から現れたかのように、突然彼女が目の前に立っていたのだ。彼女の顔の印象が今日は途轍もなく清らかだったので、彼女が帰っていくと、私がこれまで知り合った人の中で彼女が最上の女性の一人だという気持ちを抱いた。

日記 (1831年3月6日、日曜日)

夕方、一人でヨリックの『センチメンタル・ジャーニー』を数節読む。その内部に繊細さが溢れていて感嘆してしまう。(…) 私が読んだのは、ヨリックが旧友のシャンディ大尉に心服しているために、年老いた退役軍人を特に愛していることを述べる箇所である。これに刺激を受けて、私はアウグステのことを思い浮かべた。彼女への愛から、演劇に近かろうが遠かろうが、それに関係するもの全てに私はずっと前から特別な魅力を感じていた。それでピラ配布係やドア係、劇場の召使いに至るまで、心の底から彼らのことが好きになった。だから彼女の腹違いの妹(クレールヒェン)に会うのもますます楽しみになった。その子が私の前を通り過ぎる時は大抵話しかけて、手を差し伸べてほしいと頼む。

日記 (1831年3月12日、土曜日)

特別定期公演の『ポルティチの物言わぬ娘』を観劇。(…) 第一幕でアウグステのダンスを目にして嬉しかった。彼女は踊りながら、とても可愛らしい眼差しを私の方にさっと向けてくれた。多くの観客の中から私を見つけ出して、私がここに座っていることが分かっている証拠だ。彼女の眼差し、そして観客の前でも物怖じしない態度は、言葉で言い表せないほどの幸せだった。名状しがたい愛で満たされた。彼女は第三幕で、舞台装置越しに私と向かい合って座り、頷いてくれた。第五幕では、一年前にはよくそうしてくれたように、私の健康を祈って乾杯してくれた。私が彼女のことを考えているように、彼女も私のことを考えてくれているのが手に取るように分かった。

日記 (1831年3月13日、日曜日)

劇場でハイドンの『天地創造』。平土間席から合唱団の中にいるアウグステを探したが見つけられなかった。ようやく後ろの方にいる彼女を見つけることができた。遠くからとてもにこやかに頷いてくれた。

日記 (1831年3月17日、木曜日)

クレールヒェンがアウグステの手紙を持って来てくれた。モリエールの『タルチヨフ』の原文をお願いする内容が記されていた。

日記 (1831年3月19日、土曜日)

夕方、劇場で音楽そのものが持つ効果を感じ取った。しかもオーベールの素晴らしいオペラ『左官』

を聴いてそう思ったのだ。何年か前に（1826年5月）上演の準備をしていた時に、このオペラはリハーサルで何度も聴いたことがあった。生まれつつあった愛が当時瑞々しく咲き誇っていた。この愛しい女性を見る機会が十分になかったので、私は彼女が出るオペラ上演や良いオペラの本稽古を欠かすことは滅多になかった。そのような機会には遠くから彼女を探した。幕間や出番のない休憩時間に彼女は友人達と私の方に降りて来て、平土間席に陣取った。私達は陽気に他愛もないことを話し合った。彼女にも林檎を差し出すと彼女はそれを食べた。彼女が近くにいてくれるのは嬉しかったし、素晴らしい思いつきをいくつか提案してくれて生き返ったかのような気分だった。これはまだ口に出していなかったし、ほとんど意識していなかった愛情であったが、当時、私の心は最高に幸せな状態だった。私がそのような状態で聴いていた同じ音楽を今晚聴いていると、あの幸せだった日々を感じていた最も鮮やかな感情が蘇ってきた。あの頃に戻ったかのような気分だった。私は前よりも陽気で若々しい気分になった。稽古に同席して、アウグステとその友人達が私の前か隣のベンチに腰かけているような気分に、ほんの一時ではあるが襲われた。

アウグステ宛（1831年3月19日、土曜日、『左官』の後で）

親愛なる友人へ！あなたがポルティチの物言わぬ娘の役を十分に演じられるよう、私も努力していくつもりです。そのことをあなたにも知っていただきたいのです。しかし苦痛以外の何物でもないのは、とても愛しい人の傍で口を閉ざしていなければならないことですし、また沢山お話ししたいと思っている人に対して、ただ遠くから頷いて合図することしかできないことです。そのことが私にはよく分かります。

ですが、こうしてあなたにお手紙を書けるのは慰めにもなっていますし、あなたから何かしら書いたものをいただけるのは嬉しいことです。私はクレールヒェンをとても愛しています。彼女の筆跡があなたに似てきてからというもの、彼女のことがますます好きになってきました。あなたの筆跡は私の筆跡に倣って出来上がってきたものですし、それだけにゲーテの筆跡や独特なものが沢山現れています。これらの愛すべき特徴を興味を抱かず眺めることなど、私には決してできないことです。もしそれが可能なら、あなたの筆跡に倣ってもう一度字の練習をしてみたいと思っています。

あなたと同じように私も『タルチョフ』に関心を寄せていました。16日の上演の後で、私もこの作品をもっと詳しく考察してみようと思いました。あなたの筆跡に倣って、この三行を書いてみました。でもうまくいきませんでした。新しい筆さえ取り出してみたのですが、真似のできない何か独特なものがどの筆跡にもあるのです。しかし二人の筆跡が同じような精神と心根を持っていることを表わしているのは、実に誇らしい気分でした。それはどんな部分でも類似性を与えてくれるものだからです。しかし良い作品が容易くあなたの元を過ぎ去っていかないで、他の人がもう考えていないのに、あなたがそれに関心を寄せているのは私にはとても嬉しいことです。そのことをあなたに言うこともしないで、お手紙を書くという愚行を犯すほど私は愚かではありません。もし『タルチョフ』が私の蔵書にあれば、すでにお渡ししていることでしょう。あなたの願いの一つを叶えるという最高の幸せを私自身に与えてくれることだからです。私はすぐにその本を注文しました。数日中に手に入ると期

待しています。近いうちに私の蔵書リストをお送りします。そうすれば欲しい本を選べますから。

花がまだ枯れていなくてよかったです。何か活着しているものが身の回りにあればと思っていますので、鳥を一羽購入するつもりです。ですが、カナリアではありません。花鶏のような鳥を何か紹介していただけませんか。あなたは何でも知っていますから。劇場にはそういった鳥が何羽か籠に掛かっていますね。あなたが鳥をお持ちではないのは残念です。あなたの手元にあったものを傍に置いておきたいと思っていましたから。私があなたのことを忘れてしまうのをずっと待っていただいても構いません。私はあなたのことを忘れてしまおうと何度も試みました。ですが、うまくいきませんでしたし、その必要もありません。そもそも、こんなに素晴らしく愛らしいものを忘れてしまったり、頭の片隅に追いやることなど可能でしょうか。そんな努力は意味のないことです！ あなたのことを忘れようとした後で、私の心が再びあなたの心を見つけ出すまで、たっぴりと待たなくてはなりません。私はしばらく前からあなたのことを知っていましたし目にしてきました。初めて親しくなった時には、何年も前からあなたと知り合いであるかのように思えました。どうしてそう考えたのでしょうか？ 他に理由があるかもしれませんが、私にはそう考えてみてもよいのではないかと思えたのです。そんなことはありえないと誰が言えるでしょう。我々がどこから来てどこへ行くのかなんて分かるはずありません。あなたは賢い方ですからもっとよく御存知かもしれませんが、知っていれば是非教えて下さい。

この前あなたの家に伺って仮装舞踏会（3月11日）の入場券を取って来ました。仮装舞踏会には残念ながら夜遅くまで居座ってしまって、翌日上演された私の大好きな『物言わぬ娘』ではほとんど居眠りしていました。しかしこの家にいると、あなたとの思い出の品を目にしてしまい、すぐに嬉しくなって幸せな気持ちになりました。

日曜日、夕方

クレールヒェンをとても愛しているので、小さな筆箱と羽ペンをあげました。あなたがこの子の教育に尽力しているのを私はとても評価しています。結局のところ、それは誰かにしてやれる最高のプレゼントだからです。（...）

それで絵の方はどうなっていますか？ お休み中なのではないでしょうか？ あなたはカール広場を描いた絵をいつも見せて下さいませんでしたね。

もし私（とハンヒェン）に相応しい住まいに心当たりがありましたら是非教えて下さい。（...）ではお休みなさい。心の中で握手を交わしつつ。

日記（1831年3月22日、火曜日）

今日の演目の最後にイェルヴィッツ氏監修のパレエ『桶屋の職人達』。（...）外に出るとアウグステが私の後ろにいて、心のこもった態度で手を握ってくれた。ドアの前まで付き添って行った。レッシングの『演劇論』を真面目に勉強していると話してくれた。それを聞いてとても嬉しかった。



日記 (1831年3月24日、木曜日)

愛とは我々が意のままにできない力である。愛は問うこともなく我々から心を奪い取り、そして去っていく。我々はそれを押しとどめることはできない。愛とは悪魔の一部であり、あらゆるものの中で最も強力で気ままな力の一つである。

日記 (1831年3月26日、土曜日)

午前中、ラ・ロッシュに会った。アウグステが重病で、回復するには時間がかかると教えてくれた。この知らせを聞いて深い悲しみに襲われた。思わず目に涙が溢れてきた。(…)一日中アウグステの病状のことばかり考えていた。彼女の助けになって、何かして喜ばせてあげたいと願う。

アウグステ・クラーツィヒ宛 (1831年3月28日、月曜日)

親愛なる友人へ！あなたが病気なのに何もしてやれなくて、とても悲しい気持ちでいます。どこへ行っても落ち着きませんし、おそらく一日に五回か六回、あなたの家の前を歩いています。あなたの身内の誰かに会って、あなたがどうしているか教えてくれるのではないかと期待してしまうのです。

日記 (1831年3月30日、水曜日)

朝、市場に行って鳥を一羽購入。(…)食事の前にメロス教授夫人に会った。夫人はアウグステの所に行って来て、お見舞いをしてきたとのことだった。「天使みたいにベッドに横になっていましたよ」と彼女は言った。「あなたによろしくお伝え下さいと言っていました。あなたも一度お見舞いに行こうとはなさらないのですか？」(…)

食事の後、アウグステのお見舞いに行こうと決めた。彼女の母親が私を快く迎え入れ、彼女の所に案内してくれた。彼女は白い部屋着を着て、ベッドの上で上半身を起こし、私に手を差し伸べた。元気そうで、思っていたよりも病状は良さそうだった。ベッドの隣にある小さなソファまで行って、ミュラー嬢の隣に腰を下ろした。私達は他愛もない話をして、ミュラー嬢が本の中から面白いページを読み聴かせてくれた。この友人が間もなく席を外し、少しの間アウグステと二人だけにしてくれた。ザイデル嬢が来たので、ほとんど二人きりにはなれなかった。沢山話をするとうグステが咳き込むようになったので、帰った方が良いと思い、この愛らしい病人に手を差し出して本を何冊か持ってくると約束した。

彼女と話したいことは沢山あったが、不満な気持ちを抱いてその場を後にした。彼女の友人達が訪問してきて私を邪魔することに腹が立っていたのだ。(…)私は一年前からアウグステの部屋に行っていなかった。私はそうするのを拒んでいたのだが、また彼女の元にいられる時間が来るのを二三日前から楽しみにしていた。だが私は今、何とも間の悪い時間にやって来てしまった。私の希望という名の青い山脈は、到達した瞬間に灰色に変わってしまった。

しかしその他の点で密かに私の不快感を増大させたことがあった。それはどうしても黙っておけない。彼女を訪問した一年前、私はゲーテの肖像画をプレゼントして、それをベッドのすぐ近くに掛け

ておいた。当時、私はそれを良いことだと思っていたし、描かれた人物も私のプレゼントも彼女には価値のあるものだと思っていた。今日、この油絵を目にすることはできなかった。この絵が掛かっていた場所には聖母マリアの絵が掛かっていた。聖母マリアは、突き刺されて十字架に掛けられた救世主を膝に乗せていた。父の思い出の品です、と彼女は言ったので、私はその絵を褒めた。だが私は心密かにそのことを腹立たしく思ったのだった。確かに私はこの善良な少女を不当に非難している。だが繊細な情熱を持つ私からすれば、彼女が私の思い出の品を意図的かつ冷淡に自分の近くから追い出してしまったかのように思えたのだ。

アウグステ・クラーツィヒ宛 (1831年4月2日、土曜日)

あなたが一昨日の晩、本を取りに来させてくれて、私は言い知れぬ喜びを覚えました。(…)『混沌』は気に入りましたか？ その本は良いものだと思います。あなたのためだけに装丁してもらいました。その中に私が書いたものがありますが、あなたでしたら見つけ出してくれると思います。私が書いたものは少ししか載っていませんが、それが出来たのはほとんど全てあなたのお陰ですし、それにはいくばくかの真実も含まれています。女性が我々男性を愛の煉獄へと導いていかなければ、男性は世間というものを思い知るに至りません。愛の煉獄は確かに苦しみを伴って身に降りかかってくるものですが、苦しみにによって学ぶこともできるのです。

私は本来、哲学的な考察を述べたいわけではありません。私が言いたいのはただ、あなたが沢山のお見舞い客を受け入れているのを心配しているということです。(…)あなたが親しい友人達を毎日自分の所に来させるのは全く反対ではありません。ただ私なら、その他大勢のお見舞いは拒否して行うことでしょうか。あなた自身が私を招待してくれるまで、あなたは少なくとも私と会うべきではありません。ほんの一瞬のことでしたが、私もお見舞いに行きました。それはあなたにお会いし、あなたのために何かしてやることはないか自分で確かめたかったからです。私は毎日、会う人皆にあなたのことを尋ねています。だから私はいつもあなたが何をしているか知っています。

アウグステ宛 (1831年4月3日、日曜日)

今朝、ラ・ロッシュと散策に出掛けました。公園と牧草地を通り抜けて、オーバーワイマルまで行ってみました。彼が冒険旅行について話してくれたので、とても幸せな気持ちになりました。この夏、彼と近場でちょっとした旅行が何回かできればと願っています。

日記 (1831年4月4日、月曜日)

劇場で『ポルティチの物言わぬ娘』。アウグステはどの場面にも出ておらず、可愛らしい他の女優達が彼女の代役となっていた。だが彼女達は私に全く感銘を与えようとしてくれなかった。

日記 (1831年4月6日、水曜日)

グルンシュテットまで行って、当地の庭師の所で花を何本か購入。この町の手前の、一番近くにあ

る耕地とキャベツ畑では皆、畑を耕したり種を蒔いたり植物を植えたりして忙しく仕事をしていた。水車小屋に立ち寄った時、まざまざとアウグステのことを思い出さずにはいられなかった。私はここで素晴らしい夏の午後、彼女と最も幸福な日々を過ごしたのだった。果樹園の芝は再び緑色になって私に笑いかけてきた。彼女がすっかり夢中になって辺りを飛び回り、ハンカチを無理やり丸めて白いボールを作って私に投げたことを思い出した。粉屋の下の部屋に入って行きたい気持ちを抑えられなかった。立ち寄って窓越しに一瞥した。私は思った。「お前は前回、彼女と一緒にこの大きなテーブルの後ろの木製の椅子に座っていたことだろう。そして砂糖とすり下ろしたパンを入れた、濃厚でおいしい牛乳を用意して、一つの容器を分け合い、この冷たい飲み物を味わったことだろう。こんなに幸せだったことはなかった。」私はこんな具合に半ば夢を見ながら水車用の小川を上流へ歩いて行くと、あの日々を抱いていた感情がどっと溢れてきた。我々よりも高貴な存在が我々に幸福を恵んでくれて、その幸福は全てある種の獲得物と言えるものであるけれども、その獲得物を所有し享受することはどんな未来も我々から奪うことはできない。そう思わずにはいられなかった。「人は幸福を罵ることがある」と私は考えた。「なぜなら幸福は与えることをやめてしまうからである。とはいえ、それは幸福に対する不当な非難である。幸福はかつて与えてくれた全てのものを我々の手に委ねているのだから。幸福は巨大なものとなる可能性があるために、ある人にとっては多すぎるものとなってしまっただろう。幸福は気儘にあちこち動き回り、おそらく多くの人の傍にいようとして、あちこち向きを変えてしまう。ヘレナもかつては同時にギリシアやエジプトにいたし、この二つの国で幸せな人々を生み出し、冥界においてさえ影響を及ぼし、人を喜ばせるのをやめなかった。それは神々が彼女に幸福を与えたかのようだった。」私はこうしたことを思い出したり考えたりして、この極めて純粋な幸福を味わった。ただその幸福には、いつもそれ以上の諦念が付きまとっていた。――

年月が過ぎ去ってくれないだろうか！ 思い出の中にある幸福と青春時代を通じて永遠にお前は若さを保っていられるのだから。<sup>(66)</sup>

エッカーマンの1838年の詩集に収められた詩「安心」はこの言葉で締めくくられている。これは「恋愛詩 第二期」の中の最後から二番目の詩である。1831年4月12日、彼は恋人をもう一度訪問している。入手できる限りでは、5月2日に彼の日記は中断している。7月18日には鳥を二羽彼女に送り届けている。マネシツグミと花鶏である。この時彼は、鳥への情熱、つまり家禽類と猛禽類に対する情熱を語っている。彼は今でも鳥に夢中だったのだ。「こんなことに傾倒してしまって、極めて退屈な夏の間中、ワイマル中を歩き回ってばかりいます。30から40種類の鳥に関心を寄せていたので、憂鬱な物思いに耽る時間はありませんでした。では、さようなら！ すぐにお会いするか、さもなければ、あなたの具合をお聞きすることがあれば嬉しいです。あなたの親友エッカーマン。」こうしてアウグステとの手紙のやり取りも終わりを迎えた。8月29日、エッカーマンがフィアンセに述べているように、病気から回復したアウグステとはこの夏の間中、三回そこそこしか会わなかった。1831年11月9日、エッカーマンとハンヒェンは結婚した。――12日、アウグステはワイマルと

の雇用契約を解除した。後のことはもう何も言わないでおこう。1833年、アウグステは同僚のラ・ロッシュの妻となった。この年の4月、ラ・ロッシュはウィーンのブルク劇場へ行き、俳優兼演出家として当地で終身職を手に入れた。アウグステは女優の道を諦め、妻であることに満足した。だが彼女との出会いはエッカーマンの人生に長く余韻を残した。彼のささやかな詩の才能は、この体験を通じて極めて純粹で独自性のある表現となった。彼がこれまで詩人として成し遂げた最上のもは「諦め」という長い詩である。それは1831年の苦しみから生まれたものであり、ようやく1837年に完成した。エッカーマンにとっての「マリーエンパートの悲歌」とも言えるものである。その中の詩行の多くは彼の心の深奥から生み出され悲嘆に満ちているが、今日でも我々の心を激しく揺さ振るものである。

拒否された！ 失った！ そうだ、これが  
ひっきりなしに耳の内側に響き始めてきた歌だった。  
見つけたと思ったら彼女を失ったのだ。  
厳粛な運命というものが近寄り難くて見えなくなっている (...)  
君はとても若いから、そんな愛の残り火を笑うだろうか？  
君はまだ分かっていない、愛がどんな苦しみを与えるか (...)  
たった一つのみ力が最後の救いとなる。  
愛は力強い — だが時間はそれよりも力強いのだ。  
時間は私に対しても痛みを和らげる香油を差し出してくれた。  
それで心の燃え立つ欲望は鎮まった。  
私は徐々にではあるが  
再び理性の言うことに毎日ますます耳を傾けるようになっていった (...)  
茶色の髪が薄くなっているが  
白くなり始めていることにも驚いている。  
体力と体重も落ちている。  
私は毎日、友人達の嘲笑の対象となっている。  
私が朝も晩も君のいる通りを歩いているのを見て  
隣人達も揶揄ってくる。 (...)  
だから君に愛を求めるのは断念する！  
君と私の年齢ではきつとうまくいかないのだ。  
幸せになってほしい！ — 君は自分の道を歩んで  
より高い活動に向けて絶えず突き進んでほしい！ (...)  
この愛の代わりにしてくれる幸福と苦痛が  
この先、私を浄化する炎となってくれるだろう。  
私の軌道の上に君という星座をもたらしてくれたあの夕べに  
私は永遠に感謝し続ける。<sup>(67)</sup>

## 20. 所帯を持つ

1830年11月、エッカーマンがフィアンセと仲直りしてから彼女の元を去った時、二人の結婚式は翌年の春に執り行われることに決まった。恩赦を与えられた罪人のような気分で、彼は次のような計画を実行するのが一番良いだろうと夢想していた。つまり、この冬はできるだけ観劇に行かないようにしよう、ハンヒェン宛の手紙をもう一度詳細な日記形式に改め、1823年のワイマルでの最初の数ヶ月に行ったように書き直してみよう、そして経済的な基盤を早く確保すること以外考えないでおこう、ということである。彼の日記の断片や前章で報告されたアウグステ宛の手紙を見ても明らかなのは、彼が依然として劇場での職を探していて、恋人が出演する公演を簡単には見逃すことがなかったということである。フィアンセへの日記形式の手紙ではそのことには触れられていない。というのも、胸一杯の愛を抱いた花婿のように彼は気分良く過ごしていたからである。彼が臆げながらも悩んでいたのは——まだ内的な矛盾を孕んだ気分にはなっていなかったものの——ゲーテの元で行う聖なる業務が自分の結婚と全くもって相反するということであり、また経済的な困窮という険しい道のりにあって、結婚したとしても灰色の小市民的生活を送ることになるに違いないということであった。彼はアウグステに再会した。仮に滅多にしか会わず、騎士トゥゲンブルク<sup>(68)</sup>として遠くから、または手紙によって忠誠を誓うことで満足していたにしても、彼にとって彼女はまだ、愛や芸術、文芸や精神的な交流によって美化された、より高貴な存在の総体であった。それは純朴なハンヒェンでは与えてくれないものだった。夢の中で、彼は二人のライバルを姉妹のように一体化させていた。だがハンヒェンの決然とした手紙が示しているのは、彼がもう二度とそのような幻想に耽ってほしくないということだった。不信感と嫉妬を抱いていたために、彼女はそのような三角関係に耐えられなかったのだろう。この狭いワイマルでは出会ってしまうのは避けられないことで、主たる保養場所である劇場に行けば、二人が出会って気まずい思いをすることになる。アウグステが劇場にいる限り、ハンヒェンは遠くにいなければならなかった。だから彼は結婚を急ぎはしなかった。

また彼は、結婚への不安をフィアンセに秘密にしておかなければならなかった。経済的な困窮は、彼の躊躇いを十分正当化するものだった。ワイマルでの彼の立場はこれまでと同じく不安定なもので、家庭を築く勇氣は持てなかったのだ。確かに3月には手頃な住まいを見て回り、ハンヒェンと熱心に家具調度品の購入について手紙のやり取りをしている。21日にワイマルで競売があったからである。メロス教授夫人がイギリス人寄宿学校を閉校にして家具の一部を売りに出していたのだ。だがそれと同時に彼が耳にしたのは、4月にはイギリス人生徒全員がここを去っていくということだった。それで彼は不定期ささやかな収入でやり繰りしなければならなくなり、今はお金を使ってもいけない状態となってしまった。だから結婚式の延期は避けられなかった。この報告を聞いてハンヒェンはすっかり絶望してしまった。というのも、知人達に会う勇氣が彼女にはもうほとんど残されていなかったからである。待ちに待った結婚式のことを聞いてくる「忌々しい質問」に彼女はいつも答えなければならなかった。——「きつい平手打ち」をお見舞いしたいくらいです、と彼女は書いている。また彼女は、エッカーマン自身が結婚生活よりも「今の状態」を優先させ、それ故に結婚式が投げやりに行



われるという猜疑心を抑えることができなかった。ノルトハイムで最後に一緒にいた時にも、彼は「結婚生活を決して嬉しく思っていないませんでした！」という言葉さえ漏らしていた。言うまでもないことだ！ 朱に交われれば赤くなる——「二人のゲーテ」の不幸な結婚生活は、ハノーファーでは「実に詳しく」知られていた。当時ハンヒェンはそのような発言に対して、ちゃんとした返事を彼にしていなかった。だがようやく 1831 年 5 月 2 日になって自分の気持ちを率直に伝えた。「あなたがずっと自分のことだけを大切になさろうとして、私と一緒にいるのが負担になっているのであれば、私はあなたの願いに逆らうつもりはありません。」しかしエッカーマンは決して断固たる決定を下す男ではなかった。このような長きに渡る関係を解消するためには揺るがない心が絶対が必要であるが、そういったものは彼には全くなかったのだ。彼は自分の言葉に責任があると感じていたので、この義務から逃れるつもりはなかった。アウグステがいなくなるまで、ただそれを履行するのを先延ばしにしたかったのだ。彼女が雇用契約を打ち切るのは、おそらくすでに確定していたことだった。なぜなら、彼女はグレートヒェン役を断られてからというもの、ワイマル劇場ではもはや成果を上げられなかったからである。こうしてハンヒェンは、かくも長きに渡り辛抱しなければならなかったのだ。彼はこのことも正直に言うことができず、彼女の怒りを十分に静めることができなかった。というのも、彼女は彼のことを信用できなくなっていたからである。エッカーマンは軽はずみにもアウグステに宛てた詩をノルトハイムで彼女に見せていた。彼女はその詩を素晴らしい出来だと思ったが嫉妬してしまったのだ。少なくとも彼女は、結婚という「主要課題」について、これまでよりも「注意深く、明確に決然と、それほど短くしないで」、後になってから自分の意見を述べるよう要求した。だが彼も彼女も自由にお金を使えない限り、結局、最善の意志があっても何の役にも立たなかった。

こうしてエッカーマンは自分自身を納得させる時間を持つようになった。彼はアウグステへの絶望的な情熱に打ち勝てるよう随分奮闘した。3 月 30 日の彼女のお見舞いはまるで別れの挨拶同然で、空っぽで孤独な心の悲しみを後に残した。薔薇の咲く時期であっても、二年前のように彼に喜びをもたらすことはもはやないだろう。あるのはただ人生の絶頂期の苦しい思い出だった。彼の詩的な泉は枯渇した。薔薇色の詩集には、もはや詩が書かれることもなかった。その本にはアウグステに宛てた 26 篇の詩が書かれ、空白のページには 17 篇の詩のタイトルが残されている。だがそれらの計画された詩はどうしても見つからない。それらはすでに書き始められていたものの、完成しなかったのだ。3 月と 4 月、彼はほとんど毎日ゲーテの所にいた。だが家に帰ると、孤独がこれまでよりも重々しく彼の心にのしかかってきた。何か生き物を手元に置いておきたくて、3 月 30 日に黄色い交喙いすかを購入した。俗にこの鳥は足指痛風に効果があると言われており、おまけに朝の目覚まし替わりにもなった。おそらくエッカーマンは自墮落になり、朝寝坊するようになった。鳥がいてくれて嬉しくなってしまう、早速一番可愛い鳥を一ダースも手に入れた。青春時代の情熱がまるで熱のように突如として彼を襲ったのである。この一羽の鳥から数週間後には 40 羽となり、鳴禽類から猛禽類まで色とりどりに入り乱れていた！ 鳥の世話にすっかり手間がかかってしまい、何ヶ月もこれ以外のことをする時間や感覚を持てなくなった。特に猛禽類に対しては鋭い洞察力を働かせて心理学的な考察を行うようになったが、それ自体、ゲーテにとっては一つの天啓だった。<sup>(69)</sup> 1831 年 7 月 18 日の最後の手紙では、

独身男性の下宿部屋で囀る数々の鳥を描写して見せ、アウグステが男の子ではないので、手元の猛禽類を見せられないのを残念がっている。彼を完全に支配していたのは子供時代の世界だった。少年時代、荒地を孤独に歩き回ったこと、鳥の巣にこっそり近づいたこと、胸を高鳴らせて両手で温かい鳥の雛を包み込んだことを思い出した。「雛鳥に餌をやって、日に日に育っていくのを見ることほど私にとって幸せなことはありません」<sup>(70)</sup> と彼は彼女に告白している。この「情熱」<sup>(71)</sup> によって彼は極めて退屈な夏と「憂鬱な物思い」<sup>(72)</sup> の全てをやり過ごした。彼女にも鳥を二羽送った。マネシツグミと花鶏である。彼は彼女にその飼育方法を教えた。その他に彼が望んだのは、すぐに彼女に会うか、さもなければ彼女がどうしているか耳にすることだった。この新しい情熱は古い情熱を脇へ押しやっしまい、大公の鷹匠と親しくして色々教えてもらうのが今や彼の一番の関心事となった。自分が飼っている鳥のように、エッカーマンもまた新しい羽を生え換えていったのである。

子供の頃からエッカーマンは、自分が大好きなものを夢中になって観察するという宿命を背負わされてきた。『ゲーテとの対話』の中で鳥について語っている部分は、彼がこれまで書いてきたものの中で最も魅力的な箇所の一つである。だがその一方で、そのような情熱は孤独と完全な自由を必要とするものであり、それがあってこそ他を顧みることなく次の環境を作り出すことができる。そんな時、清潔さという価値を象徴する箒を持った女主人が、この動物園に折悪しく配属されたのだった。ハンヒェンは、自分がそのようなお金の使い方をがさつな乱暴行為とと思っていることや、また自分が気分良くいてほしいならそんな趣味はやめてもらいたい、という気持ちを隠さなかった。エッカーマンとは言えば、結婚式を急いで挙げる理由もなかった。というのも、秋になってようやく、自分の飼っている鳥と、飛べるようになった彼女の鳥に自由を与えられるからだった。

だが彼はこれ以上結婚式の準備を先延ばしにできなくなっていた。9月初めには部屋の片づけをした。9月4日、「エッカーマン博士は鳥を飼う趣味をやめてしまった」<sup>(73)</sup> とゲーテは日記に書き記している。ソレは9月15日、エッカーマンから知らせを受け取った。数週間後に「愛するハノーファーの女性」<sup>(74)</sup> と結婚する覚悟を決めたという内容だった。エッカーマンはこう説明している。「私は一人の素晴らしい女性を何年も待たせてしまい、彼女の幸せを邪魔してきたと非難されてきましたが、そのような非難をこれ以上受けるよりは、むしろ、とことん自分を制限してみたいと思っています。フォン・ゲーテ夫人やゲーテさえも、そしてその他の多くの人も、私の決心を一層強固なものにしてくれました。なぜなら、私が自分自身と道徳的な和解をするまで立ち止まらないということを皆分かっているからでしょう。」<sup>(75)</sup> すでにその二日前には、彼は年60ターラーの家賃で住まいを借りることにした。銀行家ウーレマンの家の三階で、部屋が三つと納戸が一つあり、劇場の向かい側にあった。エッカーマンはソレに、自分の計画を大公妃に知らせてほしいと頼んで、「大公妃にさらなる好意をお願いしてほしい」<sup>(76)</sup> と付け加えた。10月3日には引っ越しを済ませていたが、家具を備え付けねばならなかった。ソレはそのために200から300ターラーの立替金を用意することになっていた。さらにエッカーマンはワイマルの市民権を取得するか、国による任用を証明しなければならなかった。そうしないとワイマルでは教会による婚姻予告をしてもらえなかったからである。任用に関する書類は全く何も彼に渡されなかったようである。大公妃は立替金の代わりに、ベッドを二つ購入するため

の祝儀を渡している。「まだ椅子とテーブル、それに戸棚がありません。ですが、私をもう少し助けてくれる友人があと一人見つけられたらと期待しています。」これが10月9日の感謝状の内容である。市民証明書にも同じくお金がかかった。これに関しても、ソレが30ターラーの立替金を用意してくれた。28日、エッカーマンはノルトハイムでハンヒェンと結婚するために当地へ向けて旅立った。11月9日、この地で結婚式が執り行われた。11月16日、夫婦がワイマルにやって来た時にはアウグステはすでに旅立っていた。

住まいに家具を備え付けるのに、エッカーマンはハンヒェンの信頼以上に手際の良さを見せた。いとも容易くお金が彼の指に滑り込んできたのだ。ただ、お金をどこから工面したかは不明である。節約に関して彼にはどうやら才能がなかった。だが今、家計のやり繰りを一緒に始めるようになって、まだ足りないものが沢山あった。11月17日、ソレは彼と会い、「陶器製のお皿やナイフ、フォークを買うために」<sup>(77)</sup> 街を案内した。ハンヒェンは家具がとても造りのしっかりしたものだったし、修復だけで40ターラーかかった住まいをとて気に入った。新しい環境の第一印象は好意的なものだった。至る所で自分の夫と出くわすと、皆、敬意と愛情を示してくれて、実に誇らしい気分だった。今になって彼女は、毎日ゲーテの所に出入りすることが何を意味するか気付いたのだった。「ゲーテをちょっとでも近くで見るために、何かあげようとする女の子や女性がここにはいるのです」と11月19日、義姉のドレットに書いている。この幸福が自分にも与えられないことになるうとは彼女もまだ予感していなかった。ゲーテの息子の嫁であるオッティーリエから、執拗に挨拶に来よう言われていた。だが残念ながら、ハンヒェンは到着当初は全く外出できなかった。この首都にいと、自分が当惑した田舎娘のように思えたからである。彼女は相應しい帽子も持っていなかったし、コートも古臭いもので、髪型も場違いなものだったのだ！ メロス教授夫人とその二人の娘がエッカーマンの妻の「見本となる」最初の人物で、少しお転婆なマリーがすぐにこう言ってくれた。ヨハンナみたいな膨らんだ巻き毛をしているのは、この地方では「手回しオルガンを弾く女の子」ぐらいだわ。だから彼女は理髪店に行って、この地の「身分の高い」人々がしているような髪型にする必要があった。つまり、少しだけ垂れ下がった巻き毛にするか、髪型に分け目を付ける必要があったのだ。他所の地方から来たハンヒェンが完全にこの地に慣れ親しむまで、まだまだ克服すべきものが沢山あった。だがハンヒェンは善良かつ我慢強い性格で、自分で選んだ人生の課題に果敢に立ち向かった。第二の人生において、自分が夫のために有能な主婦となり、子供達の母親でなければならないことを自覚していた。家族証明書が信頼に足る証となると、エッカーマンの傍らにいたことがとても嬉しかった。彼女はそれに若い頃からずっと憧れていたのだ。エッカーマンは彼女の中に、自分に相應しい同伴者を見出した。彼が必要としていたのは、使い古しの自宅着を着て街を駆けずり回る必要もなく、自分の夢想郷に没頭できるよう注意を払ってくれる女性だった。また彼はちっともボヘミアンではなかった。その反対で、この三年間、恐ろしいほど脱線していたにも関わらず、小市民的な性格の持ち主だった。あの三年間の経験は彼には昔のことになった。彼の歩む道は、「願いと実現」という詩でとっくに思いついて描いていた、あの新しい人生に向けて拓かれていた。つまり、くつろいだ家庭の幸せに満たされながら、静かに部屋に籠って詩作するという生活にである。その詩にはこう記されている。

なぜなら、もし妻や子供を抱擁できないのなら

最上の夫でも満足などできないからである。

夫が漕ぎ出していく人生の船は、相応しい積み荷を持つとうとするのだ。<sup>(78)</sup>

## 21. 編集者としての気掛かり

エッカーマンが結婚して半年も経たないうちにゲーテが亡くなった。ゲーテのワイマルの友人達の中で、エッカーマンほどその死によって孤立した人物はいなかった。他の人達には定職があったし役職に就いていた。1823年以來、彼の生きがいはゲーテだった。1832年3月22日をもって彼の使命は終わったかに見えた。使命がなくなってしまったのだ。だがゲーテの遺した作品がその代わりとなった。ゲーテの作品はこの世に遺された貴重な遺産であったが、畏敬の念と愛情を抱きながら、この遺産に向き合う人間が必要とされていたのだ。

ゲーテの決定した遺言から、その範囲と意味において、これまでどの文学史家にも割り当てられたことがなかったような課題が生じてきた。それは改めてエッカーマンをワイマルに縛り付けるものだったし、予定されていた限度を遥かに越える時間のかかるものだった。だが同時にそれは彼を慰めるものだった。彼はゲーテの死によって自分の人生に途轍もない空隙を被り、毎日付き合っていた人物がいなくなった痛みに苦しんでいたからである。何をやっても亡くなったゲーテが以前のように自分の傍に感じるように感じられ、声が聞こえるような気がした。夜、夢を見ている時には、これまでのようにゲーテの所に赴いた。昼間でも、ゲーテを失っていないかのような錯覚に度々襲われた。最後の依頼を通じてゲーテが彼を信頼してくれたことは、誇らしく幸せな気持ちにしてくれた。

彼は自分と遺族の名前でゲーテの友人達に感動的な手紙を書いて、3月22日に世間が被ったかけがえのない喪失を伝えた。追悼文を出すことを彼は拒否した。ゲーテの文学的遺産を手に入れたいと申し出ているブロックハウスのような書籍出版業者には、遺産執行者のフォン・ミュラー法務長官に申し出るよう指示した。ジャーナリストや学者には、ゲーテの最後の日々と仕事ぶりについて情報提供した。ベッティナー・フォン・アルニムやマリアンネ・フォン・ヴィレマーのようなゲーテの友人には手紙の返却をお願いした。エッカーマンはそれらを選び出して、図書館に保管するために全部書き写させるのが一番いいだろうと思っていたのである。だがその権限があるのは法務長官だったし、目的別に分類できる人員が不足しているのは間もなく明らかになった。ゲーテの雑誌『芸術と古代』第六巻の最後の分冊がまだできていなかったので、ゲーテの家に出入りする友人達が夏の間まとめ上げた。編集作業はエッカーマンが行った。またカーライルがコッタの『モルゲンブラット』にゲーテの追悼文を寄稿したが、その翻訳も引き受けた。彼は相変わらず協力者として働き、情報を提供したり入手しなければならなかった。そうする能力が彼には備わっていた。

すでに4月には主な仕事は軌道に乗っていた。出版業者や相続人は遺作の出版を急いだ。自分が一番よく知っている故人の願いが叶うようにこの義務を果たし終われば、エッカーマンもようやくほっとして、安堵の吐息を吐くことができるだろう。遺作集は全15巻になる予定だった。エッカーマン

は各巻の内容を決定し、原稿を印刷する準備をしなげらななかつた。『ファウスト』第二部を収録する第一巻用に、ゲーテのオリジナル原稿に従った写しが用意されたが、テキストの決定稿には数えきれないほどの問題点があることが判明した。文献学者リーマーの協力があつても、それを完全に取り除くことはできなかつた。エッカーマンが鍵を所有していた箱の中にその他の原稿も入っていたが、ゲーテ自身が思っていたほどすぐには印刷に回せなかつた。『ゲッツ』初版の最終校正だけでも何週間もかかつた。この古い原稿には二千箇所以上の誤植があり、それを話し合う必要があつた。1779年の『スイス旅行』の構成についても、予想以上に多大な労力を要した。同じく演劇や芸術に関する論文の編集にも昼も夜も関係なく取り組んで、毎日舞い込んでくる校正原稿に目を通した。彼はほとんど失明寸前だつた。間もなく分量の見積もりが誤りだつたことが判明した。だが予約販売で値段がすでに設定されていたので、印刷全紙を300枚以上使って15巻の全集を作ることなど出版者のコッタにはありえないことだつた。だから色彩論の論争的な箇所のようなものの多くはそのままにしておかねばならなかつた。同じテーマに関するものが一巻にまとめられたが、個々の巻の分量は過度に限度を超えてはならなかつた。このことによって原稿をどのように配分するか難しくなり、果てしなく文通が必要となつた。この版に挿絵を入れるかどうかも検討されたが、あまりにも時間がかかつてしまうために断念した。第一回配本（第一巻から五巻まで）は1832年のクリスマスに予定されていたが、思いがけない障害が諸々生じたために先送りとなつた。1833年1月になってようやく最初の配本が完了した。だが老コッタは、もはやこの出版業界の一大事を体験することはなかつた。12月29日に亡くなつたのだ。法務長官とエッカーマンの確執のせいでは出版が遅れていた。

ゲーテの明確な意志に従つて、エッカーマンは独力で編集作業をするよう言われていた。だがエッカーマンは、リーマーや法務長官に沢山質問をして一緒に決定を下した方が得策であると思つていた。平和を愛する人間として意見の相違を避けたかつたのだが、こうした自発的な譲歩はやがて揉め事の原因となつた。『ファウスト 第二部』を収録した第一巻が、間もなくこの遺言執行者との激しい論争の種となつた。法務大臣は響きの美しい詩を沢山書くことのできる人物だつた。——ワイマルで詩作しない人などいないのだ。だが彼は自分の詩作能力に自惚れていて、『ファウスト』というドイツ文学史上最も偉大な文学作品を告知し、八行詩節シュタンツェを十個並べたプロローグを世間に向けて挿入する能力があると感じていたのだつた！彼はエッカーマンの知らない所で、遺稿第一巻という世間一般が期待を寄せる冒頭にこのプロローグを載せるよう出版者に依頼したのだ。この版の前史と構成などについてエッカーマンが行ふ必要不可欠な導入部のすぐ後に、これを載せようというのである。出来上がった印刷物によってこの編集者を不意打ちするのは流石に不可能だつた。だから法務長官は、自分が独断で行つたことに対してエッカーマンから事後的に同意を得ておきたいと考えた。法務長官はエッカーマンに親しい言葉をかけ自宅に招待した。かつてゲーテの所にいた時のように楽しく食事をした。打ち解けた気分が最高潮に達すると、法務長官は原稿を取り出し、客に向かってそれを激しく情熱を込めて朗読した。何も知らないエッカーマンは彼の畏にはまってしまった。つまり情熱的な朗読に感銘を受け、それを口に出さずにはいられなくなつたのだ。彼はいつでもすぐに熱狂してしまう性格だつたし、好意溢れるホストにお世辞を言わないで食事をするなどできなかつた。法務大臣は満足げ



にほくそ笑んだ。つまりエッカーマンがこの詩を褒め称えたということは、計画していたプロローグの活字化に反対できないということなのだ。フォン・ミュラー長官はエッカーマンに自分の計画を打ち明けた。原稿はすでにコッタが手にしていることも伝えた。

エッカーマンは驚いたようだったが妙な話だとは思わず、その場はとても仲良く別れた。当意即妙に事態に対処することは、決して彼の得意とすることではなかったのだ。だが後になって一人で考えてみると、この出来事が何を意味するか明らかになった。法務長官の巧みな方策を考えれば考えるほど、ますます彼はプロローグの挿入には同意できなかった。ゲーテの文学がゲーテ自身のことを明確に語っていないだと？ 自分の主要作品の後見人となる人物に対してゲーテならどういう言うだろう？ エッカーマンは法務長官を有能な役人で才気に満ちた社交人として評価していたが、長官が自分の周りにいることに度々我慢してきた。というのも、長官は野次馬根性丸出しで押しつけがましく無遠慮で、折に触れてメフィストフェレスのような悪意でエッカーマンに意見を述べたり非難してきたからである。エッカーマンはゲーテが怒りの眼差しを向けているのが分かった。ミソサザイが鷲と一緒にあって、永遠の名声という太陽に向かって飛んでいこうとしているぞ！と。<sup>(79)</sup>

エッカーマンは極めて気まずい立場にあった。編集者の権利が甚だしく無視されているのであれば、何とか我慢できたかもしれない。だが法務長官の詩行は、この作品の導入部に置くには相応しくないものだった。ミュラー長官は詩の写しを渡してくれた。それを読み込めば読み込むほど、この詩の弱点が際立って目につくようになった。これを黙っておいていいのだろうか？ 法務長官は手ごわい人物だった。彼は支配欲が強い人物だったし、彼の作家としての虚栄心はもっと悪質な敵だった。だがそもそもエッカーマンと長官は、ゲーテの名において分かちがたく結びついた友人同士とは言えなかったのではないだろうか？ ちょっとした犠牲を相手に強いて、自分の個人的な虚栄心を満たすということになれば、相手方の恨みを買うということはあるのではないか？ ここで問題となるのはおそらく、犠牲がどうしても必要となる和解的な形式でしかない。それでエッカーマンは、ほとんど愛情のこもったと言っていい手紙を法務長官に出したのだった。手紙の中でエッカーマンは、この計画の憂慮すべき点について法務長官に注意を促し、精査してみるとこのプロローグには沢山の誤りがあることが分かりました、と言って自分の考えを吐露した。「仮にこのプロローグが全く非の打ちどころがなく、どこまでも優れたものであったとしても」と譲歩しながらも次のように付け加えた。「あらゆる近代ドイツ文学の中でも最大の傑作である『ファウスト』の冒頭を飾るには、どうも問題があるように思えるのです。この点に関しては、敵だけでなく味方も非難してくるでしょう。このまま進んで行けば、あなたが多数の厄介事を被ることになると予想します。あなたは私にとって大切な人物であるので、こうした厄介事を避けるためにも、私は何でもやってみるつもりです。我々の間には真実がなくてはなりません というモットーが妥当性を見出すためにも、私はこうして手紙を差し上げて、少なくとも自分の考えをお伝えしようと思った次第です。」<sup>(80)</sup> これはゲーテの『イフィゲニア』の中のオレストの言葉である。エッカーマンの頭には素晴らしい比喩が浮かんでいた。つまり、オレストとピュラデスのように、二人は兄弟としてゲーテの中で一体化していたのだった。――だがその一方で、こうした結びつきに対して法務長官も別の解釈をすることができたのではないだろうか？

フォン・ミュラー長官は、このピュラデスのオレストであることを望まなかった。エッカーマンがフォン・ミュラー長官の詩を非難したのだ。エッカーマンはこのことでミュラー長官を妬んだのだろうか？ 長官は、自分のプロローグのどこに文句があるか教えてほしいと要求してきたのだ。

こうしてエッカーマンはこの件について釈明しなければならなくなった。彼はこのプロローグを徹底的に批判した。大袈裟なイメージを積み重ねることで芸術家としての論理が不足していることを納得いくように証明し、さらにミュラー長官の詩行に暗示されている『ファウスト』解釈には多くの箇所誤解があることを指摘した。この文書は八頁にも渡り、依然として和解的な調子で書かれていたものの、鋭い洞察力を見せるものだった。彼はそれを法務長官に提出した。

フォン・ミュラー長官がこの批判をどのように受け入れたかは、その結果を見れば明らかである。彼は計画していた活字化を断念し、エッカーマンの忠告に従っていくつか修正を加えた後、1833年1月1日の『モルゲンブラット』にこのプロローグを発表した。——『ファウスト』には法務長官のプロローグは掲載されないことになった——だがゲーテの遺作の第一巻にエッカーマンの前書きも掲載されないことになってしまった！ この版にはどんな前書きもなかったし、編集者の名前はどの巻にも記載されなかった。ゲーテだけでなく公衆に対しても、自分が編集作業の責任を担うことを許されているという栄誉を、エッカーマンは法務長官から騙し取られたのだ。ただ1832年12月に配布されたパンフレットにのみエッカーマンの名前が記されている。法務長官が同時期に書いた手紙、例えばドレスデンのベッティガー宛の手紙を見てみても、この版に関するあらゆる功績が自分自身に帰するものであることを読み取れるに違いない。一方でエッカーマンのことは意図的に黙殺された。法務長官は彼の前書きを第一巻に公表しないことで仕返しをしているわけだが、これ以降の版でもこの前書きは公表されることはなかった。なぜなら、遺稿集は期待したほど人々の関心呼び起こさなかったからである。ゲーテその人が戦いから身を引いているので、彼に公然と、あるいは密かに敵対していた人物も今では以前ほど威勢よく嘯みついてこなかった。ゲーテの死後すぐに匿名で『ゲーテの本』が出されており、ワイマルは騒然となっていた。そこには「ゲーテの身近で暮らしていた何人もの人物によって編集された」と書かれていて、自陣営による裏切りのように思われていた。即興詩人であり作家でもあったイエーナの大学教授 D. B. L. ヴォルフがその首謀者であることが間もなく判明した。だが、このヴォルフの駄作にどれだけ軽蔑の眼差しが向けられ無視されたとしても、その影響がないわけではなかった。1832年のクリスマスにはルートヴィヒ・ベルネの『パリからの手紙』が出て、ゲーテの『年代記』の中から棘のある詞華集を披露していた。もっと悪いのは、購入者が再収録の多いことに苦情を訴えてきたことで、彼らは自分達読者を騙していると言ってきたのだ。法務長官自身がファルンハーゲンに報告せざるをえなかったように、人々が求めているのは「これが紛れもないゲーテの作品集であるという保証であった。なぜなら編集でなされる前書きがなく、読者は何が何だか分からなかった」からである。

法務長官が自分のプロローグでそうしたように、エッカーマンはどうしてこの前書きをコッタの『モルゲンブラット』に発表しなかったのだろうか？ しばらくの間、彼はこの遺稿集の成立について小冊子を書こうと考えていた。だが、あの編集者としての不愉快な経験を考えずにはいらなかった。

これは明らかに面倒を引き起こすことになるだろう。内輪の揉め事が明らかになれば、そちらに読者の関心が向いてしまい、遺稿集の売り上げに支障が出てしまう、それはきっとゲーテの本意ではないだろう。法務長官はワイマルでは影響力のある人物だった。1833年3月13日、エッカーマンは長官に自分の考えを打ち明けた。おそらく彼はただ、少しだけ長官に牽制を加えて、これ以上干渉することに注意喚起したかったのだ。この遺産執行者は自分の方が優位に立っていて、それをはっきりと言ってやる術を心得ていた。だから長官よりも弱い立場にあり他者に依存するエッカーマンは、否応なしに譲歩しなければならなかった。結局、小冊子は書かれなかったが、二人の争いはこれで終わらなかった。1833年5月には、エッカーマンは遺産の後見人達に頼らざるを得ない状況にあった。彼は詳細な「書簡」<sup>エビステル</sup><sup>(81)</sup>を書いて自分の苦情を訴えた。なぜなら法務長官が「父親の意志に反する」<sup>(82)</sup>ことを要求してきたからである。オットーリーエ宛の添え状にはこう記されている。「フォン・ミュラー長官はおそらく、私が哀れな寂しい人間で、罰を与えることなく押しつぶしてしまえるとお考えです。ですが私だって留飲を下げたいのです。」<sup>(83)</sup> オットーリーエの説得もあって、エッカーマンは怒りを沈めることができた。5月17日、いつものようにすぐに彼女に宥められて次の返事をした。「奥様、あなたの声が私には平和の天使のように聞こえています。それがこの世ならぬ力となって、あらゆる激情的なものを沈めて下さいます。誰かと喧嘩するのは全く私の意に反することです。ですから、そのような状態が続いて私はとても悲しい気分でしたし、法務長官に私の弁護をしていただけなことには心の底から感謝しています。というわけで、フォーゲルやヴァルドウンゲンには何も言わないで下さい。将来、編集者としての私の権利がもっと考慮され注意が払われるようあなたが沢山言葉を掛けてくださって、後見人達や法務長官に影響を与えるということになるのであれば、それはあなたの善意と慈悲に委ねられることですし、そうあってほしいと思います。あなたがどんどん濃くなっていく霧を全部晴らしてくれたことに、もう一度感謝申し上げます。この霧が、煌めく春の太陽と私の幸福の太陽を何週間も前から曇らせていたのですから。」<sup>(84)</sup>

オットーリーエの仲裁によって再び平和が取り戻された。法務長官も自分の神経質な性格に打ち勝つだけの公正さはあった。オレストとピュラデスの比喻に従ってエッカーマンが思い浮かべていたような友情関係が二人の間に生まれてこなかったとしても、彼らはゲーテを巡る戦いにおいて良き戦友であって、法務長官は彼にとって親切なパトロンのままだった。1833年春、二回目の配本用原稿が印刷に回せる状態となった。9月には計画通り三回目の配本用原稿が完成した。エッカーマンが1832年5月に予定していた通りだった。1833年末に全15巻の遺稿集が出版されたのは彼の弛まぬ努力のお陰である。一年半の間、彼は「ほとんど仕事に押しつぶされて」いた。ゲーテの遺言によって負わされた義務を彼は良心的に果たした。ゲーテの遺産はこの世の人々のものとなった。自分の人生の大部分はこの中であつた、エッカーマンならそう言っているだろう。今ようやく彼は、第二の人生課題、つまり『ゲーテとの対話』の完成のために自由の身となったのだ。

## 22. 短い幸福

エッカーマンが落ち着けるのはまだ先の話であった。法務長官の嫌がらせに悩んでいた時、家庭内での苦悩が深くのしかかってきたのだ。ハンヒェンが初めて産床に就いた時、胎児が死んだ状態で生まれた。彼女が回復するまで、彼は献身的に看病する必要があった。彼女はワイマルに親族がいなかったので、エッカーマンは彼女の傍から離れることができなかった。他の人に自分の面倒を見てもらうことなど、彼女も耐えられなかったことだろう。皇太子の授業も中断しなくてはならなかった。回復には神経をすり減らしながら時間をかける必要があったが、それだけでなくお金も必要だった。教師としての収入では家計をやり繰りするにはほとんど足りなかった。ハンヒェンは二三百ターラーの持参金を持ってきたが、それらは家具調度品を買うために使い果たしていた。彼は遺稿集の第一回配本で支払われた報酬で足りない分を補わなければならなかった。春と夏はなんとか乗り切ることができた。仕事に精を出している間、将来は良い時間を過ごすという希望があったために、日々の心配事も気にしないでいられた。だが彼の健康状態にはあまりに負荷が大きかった。ワイマルの気候のせいで年々具合も悪くなってきた。皇太子の教育係ソレの許容範囲以上に、エッカーマンは度々授業を取りやめることもあった。ゲーテの原稿の編集が1833年8月に終わると、同種療法家でもある医師ケンプファーがマリーエンバートで療養するよう指示した。だがそのためのお金は十分にはなかった。彼はカッセルとパダーボルンを経由してプレーメンとハンブルクへ旅行し、故郷の空気を吸った。それはいつも彼を落ち着かせ力を与えてくれるものだった。ハンヒェン宛の手紙では、彼女と一緒にいられて自分がどれほど幸せであるか述べられている。

ワイマルに帰って来ると、自分の資金が余計に暗澹としたもののように思えた。「私が持っている全ての手持ちの現金は」と彼は10月21日にオッティエリエに嘆いている。「おおよそ20ターラーで、一週間から十日で使い果たしてしまうでしょう。ここでの生活にはお金がかかりますし、この地で二三年、立派に持ち堪えられるかどうか怪しいものです。」11月16日、彼はもう「グロッシェンも持っていなかった」。彼はオッティエリエに次回分の編集報酬の前払いをお願いしている。だが彼女自身も苦境にあり、すでに折に触れて所有している美術品を売却していた。その際にはエッカーマンも彼女の手伝いをしなくてはならなかった。11月20日、彼女は彼のために40ターラーを工面してくれた。また彼は別の方面から20ターラー借りた。彼はいつも病気がちで、蕁麻疹のために部屋から出られず、ほとんど仕事もできなかった。編集報酬も途切れて教師としての収入もなくなってしまえば、『ゲーテとの対話』を出して窮地を脱しなくてはならなかった。だが依然として遺稿集の修正があって、容態のいい時には可能だった僅かばかりの執筆時間を彼から奪ってしまった。心配のあまり心身ともに疲れ果て、過度に神経が緊張した状態だった。その結果、12月には出し抜けに皇太子の授業を取り消した。

ある時、ワイマルを訪問していたフォン・オラーニエン公子が最後の授業に居合わせ、カール・アレクサンダーの発音の悪さを揶揄ったことがあった。「ドイツ人教師と何をしていますのですか？」<sup>(85)</sup>と教師の目の前で公子はこの15歳の生徒に尋ねた。こんなのは全く役に立ちませんね、そんなこと

ではあなたは時間を無駄にさせていただきますよ！ エッカーマンさえも彼の言っていることが正しいと認めるに違いない。彼自身そう感じていたのだ。自分が悪い教師であって、英語の発音も聴いて覚えただけで基礎から勉強しておらず、イギリス人生徒との交流もなくなった二年前から、ほとんど全部忘れていたからである。だから誰かに英語で話しかけられると当惑してしまうのだった。文法についても彼は全く理解していなかった。エッカーマンは完全に打ちひしがれてこう答えている。皇太子は今後ネイティブのイギリス人に正しい発音や文法規則を習わなくてはなりません。私では全くお役に立てません、と。この告白に対するソレの返答は、彼の心から友情を示すものだった。委嘱の更新状をもらってからでない、この辞職表明を転送することはできないと言って拒否したのである。16歳半の若者の生意気な意見にそんなに左右されてはいけません。長身で肩章を付けていても、まだまだ子供なのですから！ ソレはそう述べた。この部外者たるオラーニエン公は彼ら二人の教え子の全てを、つまり服装や制服、それにフランス語の発音さえ馬鹿にした。――ソレはこう言った。あなたはだからと言って解雇されるべきなのでしょうか？ あなたが教師に採用された時、発音に改めるべき点が残されているのははっきりと分かっていました。ですがこの点は重要ではありません。まず大事なのは英語の文章を読むことを学ぶことだったのであります。あなたの授業はこれまであらゆる要求を適切に満たしてきました。それは皇太子の進歩が証明しています。それにあなたはあの生意気な皮肉屋よりも上手に話せます。あの冷やかしには良かれ悪しかれ我慢しなくてはなりません。あなた自身も子供であることを望まないでしょうし、もし誰かがあなたや皇太子のために授業をやめるよう忠告してきたとしても、私があなたに正直にお話ししようとしているのは分かって下さるでしょう。最後にソレはゲーテを示唆する言葉で締めくくった。「無思慮な言葉によって取り乱してしまっても、ゲーテの辿った道を行かないで下さい。お人好しな人達が辿る道を行くのです。」<sup>(86)</sup> エッカーマンはこの訴えに逆らうことができず、すぐに退職を撤回した。

いずれにしても年末には熱望していた最後の報酬の支払いがあった。全体として、この編集業務で1125ターラーを受けることができた。その結果、ハンヒェンは何も不自由することがなく、ザクセン＝ワイマルという「貧乏な国」とうまく折り合いをつけたのだった。1月にエッカーマンは自分の将来を左右する『対話』に懸命に取り組んだ。だが21日にはこの作業も再度中断した。彼は肝臓病に苦しんで、作業を続行する気にはなれなかったのだ。この中断を埋め合わせようとして、音楽監督エーバーヴァインのために『ファウスト』第二部を舞台用にアレンジし始めた。これは将来的に実現できるように、ゲーテが夢中になってエッカーマンと考えてきた企画だった。2月初旬、第二幕がエーバーヴァインの手に渡った。第三幕はまだ欠けたままだった。この『ファウスト』は全体として三部作となるはずだったが、この第一幕と第二幕は三部作の上演一日目に予定されていた。『ファウスト』は音楽の助けを借りて上演することになっていて、それはゲーテ自身も熱望していたことだった。これは『皇帝の居城におけるファウスト』というタイトルで、原作の第一幕だけを網羅している。本質的にエッカーマンはゲーテのテキストに依拠している。ただ所々短くして、計画的に合唱部分を入れることも考えて、継ぎはぎの詩行をいくつか挿入した。彼はファウストとメフィストでは全く違った気持ちを抱いていることを明確にするために、第一幕だけは導入部を据えることが必要だと考えた。



さらに、この二人のシーンに比較的多くの紙面を割いた。この中で彼は、ファウストの詩行にも親しみやすいリズムと響きを織り込んで、自分がどれほど上手にゲーテを真似することができるか証明した。それと並んで、完全にゲーテの文体でそれぞれの場面に関する詳細な説明と解説を加え、この初めてのファウスト演出において、彼自身が持つゲーテに関する広範な知識を駆使したのだった。それは部分的に、すでに彼の対話録の原稿にも見て取ることができる。

この仕事は新たに不運なことがあったために中断された。1834年3月26日、ハンヒェンが彼に第二子を授けてくれた。第一子を失っていたために、それはとても嬉しい埋め合わせだった。だがエッカーマン自身はインフルエンザで体が弱っていて、妻子が近寄ってはいけないう状態だった。4月6日、幼いカールに洗礼が施された。他にも沢山いる中で洗礼立会人となったのは、オットーリエ・フォン・ゲーテとフォン・ミュラー法務長官だった。オットーリエは洗礼式を手配してくれ、食器やテーブルクロスを貸してくれた。「いつもよりも上品な給仕」をしてもらうために、ゲーテの元で働いていた召使いの老フリードリヒさえ寄こしてくれた。エッカーマンは皇太子に洗礼立会人になってくれるよう頼むことはできなかった。皇太子の代理人に相応しい接待ができないからである。代理人は大抵の場合、本人よりも多大な要求をしてくるものなのだ。14日、彼はある程度病気から回復したが、今度は妻が寝込んでしまった。炎症を起こし咯血したのだ。――三週間後に悲劇が起こった。4月30日、ハンヒェンが亡くなった。5月3日、彼女は埋葬された。エッカーマンはまたしても病気になってしまい、葬儀に参列することさえできなかった。この決定的な不幸に感覚が麻痺してしまったようで、ようやく徐々にはあるが自分の不幸を理解するようになっていった。どんな言葉も彼には出てこなかった。「いつまでも忘れられないあの人を追想するために」彼は詩を捧げたことがあるが、それは四年前に亡くなったルイーゼ大公妃に捧げたものだった。当時この詩ができたのは、「ハンヒェンは自分から引き離されている」というイメージの中に身を置くことができたからであった。――未来の臆げな予感が今や恐ろしい現実となってしまったのだった。

彼女のことを考えると

泣きはらしたこの夕べの時間の中に、静かな平穏が流れ込んでくる。

彼女を感じる、まるで離れ離れになっていないかのように

永遠に変わることなく、私の心と結びついているかのように。<sup>(87)</sup>

だが彼は、こうした甘い平穏からまだかけ離れた所にいた。それから数ヶ月は悲しい用事で一杯だった。墓を注文し、親類や友人に報告をし、形見を分け、死者の遺産を整理しなければならなかった。遺産に関しては、その一部を子供に確実に渡すよう裁判所に言われた。息子の後見人は図書館司書のクロイターとなった。助産婦に母親代わりとなってもらい、家政婦に妻の代わりとなってもらった。だがこの家政婦は盗みを働いたので、すぐに解雇した。食事の世話が必要だったので、彼は食堂の食事で暮らした。オットーリエ・フォン・ゲーテができることを手伝ってくれた。彼はできれば全部売り払って、家族の幸福の忘れ形見である子供と一緒に親族の所へ逃げ出してしまいたかった。もし

自分が病気になったり死んでしまえば、子供と財産は見ず知らずの人の手に渡ってしまう。こんなことばかり考えて彼は不安に駆られ、何度も絶望的な気分になってしまった。差し当たり生計をどうするかという問題があったので、彼はまだこの呪われたワイマルに拘束されていた。だが「あらゆる根拠と喜びを失ってしまった」この地に留まりたくはなかった。できるだけ早く故郷に帰りたかった。

大公妃はソレから事の次第を全て教えてもらい、エッカーマンの不幸を悲しんだ。だから大公妃は彼をヘルゴラント島へ保養に行くよう送り出し、旅行費用として100ターラー与えることを認めた。後見人のクロイターは子供と家の面倒を見ることになった。オッティーリエが友人とライン河畔に滞在していたからである。ハンヒェンが大目に見てくれた最後まで飼っていた鳥も売らねばならなかった。——一体誰がその世話をするというのだろうか？ 完成までは程遠い彼の本の原稿は、ゲーテの遺稿書類とともにクロイターに預けた。

ハンブルクに滞在すると彼は生気を取り戻し、八週間、海の空気を吸い海水浴をした。その後はかなり体調もよくなった。だがワイマルへ帰って来て寂しい住まいに足を踏み入れると、故人を思い出すものばかり目に入ってしまい、すっかり落ち込んでしまった。旅の往路でも帰路でも沢山の旧友に会ったせいで、ワイマルは墓地のように思えてしまった。幸福の墓所としか思えなかったのだ。彼はこうした心の痛みにも憑りつかれてしまい、友人や知人に会うのを避けた。病的なまでの人間嫌いになってしまったのだ。それを克服しようとしたが無駄だった。少し前に帰郷していたオッティーリエに宛てた9月18日の手紙の中で、彼は次のように述べている。「偶然、窓辺に立って、私のことを訪問しようとする人が通りを歩いて来るのが見えると、自分の知らない人である時などは特に毎回不安に満たされてしまいます。鏡の前に立っても死神のように青ざめてしまいます。誰かを訪問しようとする時でも全く同じ状態です。時間が迫っていてもますます塞ぎ込んでしまって、ようやく部屋の中に入っても大抵は心臓が激しく鼓動して、言葉が出て来なくなってしまうのです。」<sup>(88)</sup> 彼の人生の最大の苦痛は、友人達がそのことによって自分に不信の念を抱き、背を向けていくことであった。彼はこの手紙を次のような深い悲しみの言葉で締め括っている。「誰も私のことを愛していないかのような気がしています。明日死んでも、誰も私のことを悲しんで涙を流すようには思えません。こんな風に考えてしまったせいで、私は自分の内部に荒涼とした魂の貧困を呼び起こしてしまい、外側に目を向ける勇氣を持てなくなっています。」<sup>(89)</sup> 空しい四巻本を書いていると過去と現在を比べて辛くなってしまい、昼夜を問わず苦しみが襲ってきた。彼には身を委ねることのできる心の友もいなかった。この絶望的な気分を表現したのが「願いと充溢」という詩である。彼がかつて、どのように自分のささやかな未来の幸福を思い浮かべていたのか、そしてそこから何が生まれ、今後続いていこうとしているのか——心優しい神が彼の前にも現れて、苦しみを詩で表現する才能を分け与えてくれた。

若かった時、自分が力と希望に満ち溢れていると思っていたし

歌も次々に湧き出てきた。

だから私は13年以上も書いてきた。

ああ！ 今では心が満たされることも少なくなってしまったことだろう！ ——

心の渴きが癒されないままなのだろう！  
私の願いも慎ましいものとなってしまったことだろう。

求めたものも与えられはしなかった —  
私を幸せにしてくれないもの、力を振り絞って避けようとしたもの  
そういったものが無理やり押し付けられた。  
だから何年も腹立たしい思いを抱いてきた。  
それは私を望んでもいない道へと引っ張っていったので  
幸福もほとんどなく、幾多の苦難に遭遇してきた。

そうこうするうちに、私は随分と世間というものを目にしてきた。  
私が経験したのは、風が物腰柔らかに甘言を弄しながら  
悪意を持って吹きつけてくることだった！ —  
可愛い子供が膝の上で微笑んでいるというのに —  
だが私は独りぼっちになってしまった — 彼女が、ああ、彼女がいてくれたら！  
心から彼女のことを愛していた — だが今は彼女を草が覆っている。

心穏やかに永眠している彼女から、どんな言葉も聞こえてこない。  
彼女はこの世のどんな賞賛すべきものと比べても、引けを取らない人だった。  
私にできることは、ただ黙って厳かな気持ちで彼女に想いを寄せることだ。  
仮に彼女と同じくらい善良で素晴らしい人がいたとしても  
私の愛の幸福は終わってしまった。  
第二の心が私の中で鼓動することなどありはしない。(…)

だが私は前へ進まなければならない！ — 他に選択肢などないのだ！  
幸福へ向かってであろうと、苦痛へ向かってであろうと  
その才能が詩人を駆り立てていくのだ。悪魔的な流儀に従って  
暴力的に — それは夜の眠りを吹き飛ばし  
作品が完成するまでじっとしていることはない。  
その作品が詩人を破壊してしまうとしても — それは容赦することはない。

だからもっと先へ進まなければならないのだ！ — 仮に  
名声の頂点に選ばれなくても  
祖国で私の名前が上位に挙げられればいいのだ。  
私の飾り気のない歌と言葉を通じて

至る所で感じの良いこだまを生じさせよう。

そうすれば苦労と努力を失わないでいられるのだ。<sup>(90)</sup>

本稿は H. H. Houben: Goethes Eckermann. Die Lebensgeschichte eines bescheidenen Menschen. Berlin/Wien/Leipzig (Paul Zsolnay) 1934 の第 17 章から第 22 章までを訳出したものである。第 16 章までは以下を参照のこと。

林久博：「翻訳：H. H. ホウベン 『ゲーテのエッカーマン — ある控え目な人間の伝記』(4)」、『教養教育研究院論叢』第 2 巻第 1 号、中京大学教養教育研究院、2021 年、11～62 頁

注

- (1) Goethe: Werke. Hrsg. im Auftrage der Großherzogin Sophie von Sachsen. III. Abtheilung. 12. Band. Weimar (Hermann Böhlau Nachfolger) 1901, S. 186. [Tagebuch: 24. 1. 1830] (Reprint: Sansyusya)
- (2) Ebd., S. 187. [Tagebuch: 27. 1. 1830]
- (3) Tewes, Friedrich (Hrsg.) : Aus Goethes Lebenskreise. J. P. Eckermanns Nachlaß. 1. Band. Berlin (Goerg Reimer) 1905, S. 95. [Eckermann an Johanne Bertram (20. 3. 1830)]
- (4) Goethe, III. Abtheilung. 12. Band, S. 225. [Tagebuch: 13. 4. 1830]
- (5) Tewes, a. a. O., S. 95.
- (6) Goethe: Wilhelm Mesiters Lehrjahre. In: Werke. 7. Band. München (C. H. Beck) 1994, S. 145.
- (7) Tewes, a. a. O., S. 97. [Eckermann an Johanne Bertram (13. 4. 1830)]
- (8) Ebd.
- (9) Ebd., S. 99. [Eckermann an Johanne Bertram (21. 6. 1830)]
- (10) Kuhn, Dorothea (Hrsg.) : Goethe und Cotta. Briefwechsel 1797-1832. 2. Band. Stuttgart (Cotta) 1979, S. 281. [Elisabeth von Cotta an Goethe (20. 5. 1830)]
- (11) Goethe: Werke. Hrsg. im Auftrage der Großherzogin Sophie von Sachsen. IV. Abtheilung. 47. Band. Weimar (Hermann Böhlau Nachfolger) 1909, S. 115. [Goethe an August von Goethe (29. 6. 1830)]
- (12) Tewes, a. a. O., S. 100. [Eckermann an Johanne Bertram (5. 9. 1830)]
- (13) Goethe, IV. Abtheilung. 47. Band, S. 21. [Goethe an Elisabeth von Cotta (18. 4. 1830)]
- (14) Houben, Heinrich Hubert: J. P. Eckermann. Sein Leben für Goethe. Nach seinen neu aufgefundenen Tagebüchern und Briefen dargestellt. Teil 1. Hildesheim (H. A. Gerstenberg) 1975, S. 503. [Eckermann an Goethe (12. 9. 1830)]
- (15) Ebd., S. 506.
- (16) Ebd., S. 505.
- (17) Ebd.
- (18) Ebd., S. 507.
- (19) Ebd., S. 509.
- (20) Ebd., S. 508.
- (21) Ebd.
- (22) Ebd., S. 509.
- (23) Ebd.
- (24) Soret, Frédéric: Zehn Jahre bei Goethe. Erinnerungen an Weimars klassische Zeit 1822-1832. Heildesheim/Zürich/New York (Goerg Olms) 1991, S. 464. [Eckermann an Soret (17. 9. 1830)]

- 25 Eckermann, Johann Peter: *Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens 1823-1832*. Berlin (Deutscher Klassiker Verlag) 2011, S. 412.
- 26 Goethe: *Werke*. Hrsg. im Auftrage der Großherzogin Sophie von Sachsen. IV. Abtheilung. 48. Band. Weimar (Hermann Böhlau Nachfolger) 1909, S. 106. [Goethe an Zelter (1. 2. 1831)]
- 27 Ebd.
- 28 Houben, a. a. O. (Teil 1), S. 513. [Eckermann an Goethe (10. 10. 1830)]
- 29 Eckermann: *Gespräche mit Goethe*, S. 419.
- 30 Houben, a. a. O. (Teil 1), S. 517. [Eckermann an Goethe (21. 10. 1830)]
- 31 Soret, a. a. O., S. 473. [Eckermann an Soret (20. 10. 1830)]
- 32 Ebd.
- 33 Houben, a. a. O. (Teil 1), S. 517.
- 34 Vgl. Eckermann: *Gespräche mit Goethe*, S. 424.
- 35 Ebd., S. 420.
- 36 Ebd., S. 383.
- 37 Ebd.
- 38 Ebd., S. 423f.
- 39 Ebd., S. 419.
- 40 Goethe, IV. Abtheilung. 48. Band, S. 31. [Goethe an Zelter (6. 12. 1830)]
- 41 Eckermann: *Gespräche mit Goethe*, S. 425.
- 42 Goethe, III. Abtheilung. 12. Band, S. 342. [Tagebuch: 12. 12. 1830]
- 43 Goethe: *Werke*. Hrsg. im Auftrage der Großherzogin Sophie von Sachsen. III. Abtheilung. 13. Band. Weimar (Hermann Böhlau Nachfolger) 1903, S. 40. [Tagebuch: 3. 3. 1831]
- 44 Tewes, a. a. O., S. 273. [Nachtrag zu Goethes Testament]
- 45 Ebd., S. 270. [Abkommen zwischen Goethe und Eckermann]
- 46 Ebd., S. 108. [Eckermann an Johanne Bertram (17. 12. 1830)]
- 47 Ebd.
- 48 Ebd., S. 113. [Johanne Bertram an Eckermann (20. 1. 1831)]
- 49 Ebd., S. 114.
- 50 Ebd., S. 115. [Johanne Bertram an Eckermann (2. 2. 1831)]
- 51 Houben, a. a. O. (Teil 1), S. 521f. [Eckermanns Tagebuch: 10. 2. 1831]
- 52 Tewes, a. a. O., S. 115. [Johanne Bertram an Eckermann (2. 2. 1831)]
- 53 Ebd.
- 54 Ebd., S. 119. [Johanne Bertram an Eckermann (13. 7. 1831)]
- 55 Goethe, III. Abtheilung. 13. Band, S. 138. [Tagebuch: 14. 9. 1831]
- 56 Ebd., S. 172. [Tagebuch: 17. 11. 1831]
- 57 Ebd., S. 175. [Tagebuch: 20. 11. 1831]
- 58 Tewes, a. a. O., S. 27. [Johanne Bertram an Eckermann (? . 7. 1823)]
- 59 Goethe, III. Abtheilung. 13. Band, S. 226. [Tagebuch: 29. 2. 1832]
- 60 Ebd., S. 173. [Tagebuch: 18. 11. 1831]
- 61 Soret, a. a. O., S. 593. [Soret an Karoline von Elgoffstein (17. 11. 1831)]
- 62 Ebd.
- 63 Goethe: *Werke*. Hrsg. im Auftrage der Großherzogin Sophie von Sachsen. IV. Abtheilung. 49. Band. Weimar (Hermann Böhlau Nachfolger) 1909, S. 220. [Goethe an Zelter (27. 1. 1832)]



- 64) 第 19 章に挿入されたアウグステ宛の手紙全文は以下で参照可。  
Petersen, Julius (Hrsg.) : Eckermanns Briefe an Auguste Kladzig. In: Jahrbuch der Sammlung Kippenberg. Bd. 4. Leipzig (Insel) 1924, S. 93-190.  
[<http://www.goethezeitportal.de/infocenter/goethemuseum/goethe-museum-duesseldorf/schaetze-aus-dem-goethemuseum/jahrbuch-kippenberg/band-4/band-4-blatt-010.html>]
- 65) 第 19 章に挿入されたエッカーマンの日記全文は以下で参照可。  
Houben, a. a. O. (Teil 1), S. 521-576. [Das 18. Kapitel: Eckermanns Weimarer Tagebuch 1831]
- 66) Eckermann, Johann Peter: Gedichte. Leipzig (Brockhaus) 1838, S. 131.  
[[https://books.google.de/books?id=KfcKAQAIAAJ&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs\\_ge\\_summary\\_r&cad=0#v=onepage&q&f=false](https://books.google.de/books?id=KfcKAQAIAAJ&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs_ge_summary_r&cad=0#v=onepage&q&f=false)]
- 67) Ebd., S. 265ff.
- 68) シラーの物語詩「騎士トッゲンブルク」(1798 年)では、騎士トッゲンブルクは十字軍遠征に参加する。だが恋人のことが忘れられず帰国すると、彼女は修道院にいることが判明する。彼女が窓から顔を出してくれないかと、彼は死ぬまで遠くから修道院を眺め続ける。
- 69) 1831 年 5 月 29 日の『ゲーテとの対話』参照。部屋の中で飼っていた親鳥が餌を探すために外へ出ても、部屋の中にいる雛鳥の元へ戻って来る様子をエッカーマンはゲーテに語った。それに触発されて、ゲーテは愛の本能について語っている。
- 70) Petersen, a. a. O., S. 178.
- 71) Ebd.
- 72) Ebd.
- 73) Goethe, III. Abtheilung. 13. Band, S. 133. [Tagebuch: 4. 9. 1831]
- 74) Soret, a. a. O., S. 576. [Eckermann an Soret (15. 9. 1831)]
- 75) Ebd.
- 76) Ebd., S. 577.
- 77) Ebd., S. 593. [Soret an Karoline von Elgoffstein (17. 11. 1831)]
- 78) Eckermann: Gedichte. 1838, S. 272.
- 79) Vgl. Goethe: West-östlicher Divan. In: Werke. Hamburger Ausgabe in 14 Bänden. Hrsg. von Erich Trunz. Band 2. München (C. H. Beck) 1994, S. 54.
- 80) Houben, Heinrich Hubert: J. P. Eckermann. Sein Leben für Goethe. Nach seinen neu aufgefundenen Tagebüchern und Briefen dargestellt. Teil 2. Hildesheim (H. A. Gerstenberg) 1975, S. 44. [Eckermann an Kanzler von Müller (7. 11. 1832)]
- 81) Ebd., S. 53. [Eckermann an Ottilie von Goethe (13. 5. 1833)]
- 82) Ebd., S. 54. [Eckermann an Ottilie von Goethe (17. 5. 1833)]
- 83) Ebd., S. 53. [Eckermann an Ottilie von Goethe (13. 5. 1833)]
- 84) Ebd., S. 53f. [Eckermann an Ottilie von Goethe (17. 5. 1833)]
- 85) Ebd., S. 77. [Eckermann an Soret (24. 12. 1833)]
- 86) Ebd., S. 81.
- 87) Eckermann: Gedichte. 1838, S. 37.
- 88) Houben, a. a. O. (Teil 1), S. 611f. [Eckermann an Ottilie von Goethe (18. 9. 1834)]
- 89) Houben, a. a. O. (Teil 2), S. 98. [Eckermann an Ottilie von Goethe (18. 9. 1834)]
- 90) Eckermann: Gedichte. 1838, S. 273ff.